

## 近代及び現代漢語白話資料にみられる“價”の機能と特質

### Research on the Function and Special Feature of ‘jie’ in the data found in a Modern and Present Spoken Chinese.

藤田 益子

#### 摘 要

在近代、現代漢語白話資料中，“價”出現在各種性質的詞的後面。特別是在口語中出現的頻率非常引人注目，其中北京話資料《兒女英雄傳》中的用例數量尤為突出。因為“價”在北京現代口語中仍在使用的，所以在很多北京話辭典中都被定位為北京話。但是，我曾在論文（1992）中明確指出，對把“價”定位為北京話存有疑問。

如果“價”不是北京話，為什麼它在《兒女英雄傳》中的用例數量如此之多，另外它的根源在哪兒？為了查明“價”的根源和性質，本稿對早期用例進行查證，以《兒女英雄傳》的用法為基礎，從使用過“價”的20多種近代白話資料中提取“價”的用例，從前置詞的性質和機能的角度的角度進行詳細地分析。

同時，以這種歷史性考察為基礎，對“價”的多重性質，及其歷史背景下的社會性、地域性也加以考察。

#### 目 次

はじめに.....	22
1. 『兒女英雄傳』における“價”.....	23
1. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例.....	23
1. 2. 「大小や盈滿 <small>えんまん</small> を表す形容詞＋名詞」構造の接尾成分となる用例.....	24
1. 3. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例.....	24
1. 4. 副詞の接尾成分となる用例.....	27
1. 5. 一定の範囲を示す表現の接尾成分となる用例.....	27
1. 6. 否定・禁止の語の接尾成分となる用例.....	28

2. 早期の用例	29
2. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例	29
2. 2. 「大小や盈満を表す形容詞＋名詞」構造の接尾成分となる用例	30
2. 3. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例	31
2. 4. 副詞の接尾成分となる用例	31
2. 5. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例	31
3. その他の近代漢語白話資料にみられる“價”・“家”・“假”	32
3. 1. 『三国演義』	32
3. 2. 『水滸伝』	32
3. 3. 『金瓶梅詞話』	35
3. 4. 『古今小説』	35
3. 5. 『警世通言』	35
3. 6. 『醒世恒言』	36
3. 7. 『拍案驚奇』	36
3. 8. 『二刻拍案驚奇』	37
3. 9. 『醒世姻縁伝』	38
3. 10. 『緑野仙踪』	40
3. 11. 『紅樓夢』	42
3. 12. 『七侠五義』	43
3. 13. 『九尾亀』	43
3. 14. 『八仙得道伝』	44
3. 15. 『官場現形記』	44
3. 16. 『孽海花』	45
3. 17. 『老残遊記』	45
3. 18. 『老残遊記続集』	47
3. 19. 『老残遊記外編卷一（残稿）』	48
3. 20. 『雍正剣侠図』	48
3. 21. 『官話類編』	48
3. 22. 老舎の作品	49
4. “價”に関する歴史的考察	50
4. 1. 近代漢語白話資料にみられる“價”の用法	50
4. 2. 6種類の用法と近代漢語白話資料の関係	52
5. 特異的な“價”	52

5. 1. 否定・禁止の語の接尾成分となる“價”	53
5. 2. 『兒女英雄伝』における否定・禁止の語の接尾成分となる“價”	59
6. 現代漢語資料における否定・禁止の語の接尾成分となる“價”	60
6. 1. 現代小説にみられる用例	60
6. 2. 否定・禁止の語の接尾成分となる“價”と現代漢語資料の関係	62
7. 現代漢語詞典及び主要北京語辞典の用例と解釈	62
8. 否定・禁止の語の接尾成分となる“價”の特質	63
8. 1. 近代漢語白話資料における否定・禁止の語の接尾成分となる“價”	63
8. 2. 近代北京語白話資料における否定・禁止の語の接尾成分となる“價”	64
8. 3. 社会性と役割語としての性質	64
8. 4. 地域性と土語としての性質	65
9. 表記と発音	66
9. 1. 文字表記の問題	66
9. 2. 発音の問題	67
おわりに	67

## はじめに

接尾辞としての“價”は、白話資料において様々な性質の語の後に現れる。特に口語としての用例が目立ち、中でも北京語を用いた資料として知られる『兒女英雄伝』には突出した用例数が確認される。更に現代の北京口語においても実際に使用されていることから、“價”を北京口語と位置づける北京語辞典類も少なくない。しかし、その“價”の北京語としての位置づけに疑問が残ることは、既に拙稿（1990）において指摘済みである。

ただ、北京語でないとするならば、何故、『兒女英雄伝』に突出してその用例が見られるのか、またそもそも何処に端を発する語なのか。本稿では、このような“價”の根源と特質に関する疑問を解決するため、新たに早期の用例を検証し、『兒女英雄伝』で確認される複数の用法を基に、“價”の使用が認められた二十数種類の近代白話資料に現れる“價”の用例全般を抽出し、前置する語の性質とその機能という観点から、更に詳しい対象分析を行う。

このような歴史的考察に基づく接尾辞としての“價”が持つ複合的な性質の考察に合わせ、更にこの語が背景に持つ社会性・地域性に関わる特質も検証する。

## 1. 『兒女英雄伝』における“價”

『兒女英雄伝』において、“價”を用いる例文は四十四例見られる。“價”が続く文成分の性質によって六種類に分類される。

### 1. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例

この用法は、いずれも会話文中に用いられている。

#### 1. 1. 1. 「不定の時間量」の接尾成分

##### 1. 1. 1. 1. “一會（兒）價”

例：“外加着這兩年有點子反老還童，一會兒價好鬧個小性兒。”（14）

（「おまけにここ数年、少々子供に返ったようで、時々癩癩<sup>かんしゃく</sup>をおこしたりするのです。」）

例：“再他老人家一會兒價那派怯話兒、蠢勁兒，合那一雙臭脚丫兒、臭葉子烟兒，却也令人難過。”（22）

（「その上、あの方が時々あんな風な場違いな話をするとところや、垢抜けないところ、それにあの臭い足、臭いタバコの臭いが加わって、本当に参ってしまうわ。」）

例：“只是一會兒價回過頭來往後看看，拿我這麼一個人，竟缺少條墳前拜孝的根，我這心裡可有點子怪不平的。”（32）

（「ただ時々振り帰ってみると、こんな私には、こともあろうに喪に服してくれる跡継ぎがおらず、心中至極穏やかでないところが全く無いというわけでもないのです。」）

例：那華忠應了一聲進來，只見他臉上發青，摸了摸，手足冰冷，連說話都没些氣力，一會價便手腳亂動，直着脖子喊叫起來。（3）

（華忠は返事をして戻ってきましたが、見れば顔色が真っ青で、手足に触ってみると氷のように冷たく、口もきけないほど弱まっています。しばらくすると、手足をむやみやたらと動かす、首を伸ばして唸り始めました。）

例：舅太太笑道：“我們這個姑娘，說他没心眼兒甚麼事兒都留心；說他有心眼兒，一會價說話真像個小傻子兒！”（27）

（佟夫人は笑って、「うちのこの娘ときたら、彼女が能天気<sup>なまけ</sup>に気をまわさないかということ、色々なことを心に留めているし、彼女が思慮深く気をまわすかということ、時々本当にお馬鹿さんみたいな物言いをしたりするのですよ！」と言いました。）

例：“姐姐說話可一會價的性急，他的脾氣可一會兒的價<sup>1)</sup>性左，咱們可試着步兒來”；(30)  
(「お姉様のお話は、時にととてもせっかちなところがありますし、うちの人の気性は、時にととても頑固なところがありますから、私たちは様子を見ながら事を進めるべきですわ。」)

1. 1. 2. 固定的な数詞+量詞

ここでの数詞は、“一”以外に入れ替えることはできない。

1. 1. 2. 1. “一聲兒價”

例：“你二位老人家怎的儘着你女孩兒這等叫，答應都不答應一聲兒價？”(19)  
(「お父様お母様は、どうしてあなた方の娘がこんなにも呼んでいるのに、一言もお返事をしてくださらないのですか？」)

1. 2. 「大小や盈満を表す形容詞+名詞」構造の接尾成分となる用例

『兒女英雄伝』においては、“價”が、「大小や盈満を表す形容詞+名詞」構造の接尾成分となる用例は、この1例を見るのみである。『水滸伝』には複数用例があり“大腕價篩來，教武行者吃，”のような“大～”の例のほかに、“小～”を用いた“酒把大腕來篩，不耐煩小盞價吃。”(38)の例もみられる。このような『水滸伝』の用法に対して、香坂(1987, p.481)は、「何を用いてどうするか、つまり道具状語であるということであり、極めて限られた場合のみ用いられている。」としている。

例：便坐在這席合安老爺大盃價暢飲起來。(39)  
(さっそくこの席に座って学海様と大きな杯で思う存分飲んだのでした。)

1. 3. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

鄧九公と張太太(張家の奥さん)の会話文に現われる例が二例あり、その他は、全て叙述文(地の文)における用例である。

1. 3. 1. 動賓構造の後に置かれた状語の接尾成分

例：偏偏從工完這日下雨起，一連傾盆價的下了半個月的大雨，(2)  
(あいにく工事が終わった日の雨から、ずっとたらいをひっくり返したような半月もの激しい雨が降り続けました。)

例：一日，正遇着陰天，霎時傾盆價下起大雨來。(24)  
(ある日、折しも曇り空に、たちまちたらいをひっくり返したように激しい雨が降り出してきました。)

例：走了也有一會，正在盼到，只聽得噶啦啦一片聲音，兩掛千頭百子旺鞭放得振地價響，鼓手便像是一對對站住，想是到了門了。(28)

(しばらく歩いて、着くのを待っていると、バチバチと音が聞こえた後に、二つに掛けられた千連発百連発もの爆竹が地面を揺るがすほどに鳴らされ、先導の太鼓をたたく者が対になって合わせて立ち止まったようなので、もう着いたのだと思いました。)

### 1. 3. 2. 熟語形式の後ろに置かれた状語の接尾成分

例：隨着便是地坼山崩價一聲響亮，嚇得他一步踏空雲腳，一個立足不穩，早從雲端裡落將下來。(0)

(続いて地が裂け山が崩れたような音が響き渡ったので、驚いて一步雲から足を踏み外してしまい、片方の足場のバランスを崩して、あっという間に雲間から転げ落ちました。)

例：只聽外面一片哭聲，男的也有，女的也有，老的也有，少的也有，搖天振地價從門外哭了進來。(20)

(外に大勢の人の泣き声が聞こえます。男もいれば、女もいて、年寄りもいれば、子供もいて、天や地を揺るがすように外から泣きながら入ってきました。)

### 1. 3. 3. “(也) 似+價”の形をとる修飾語の接尾成分

『兒女英雄伝』において、「～のような」の意味を表す“似”を用いた表現には、“似的”、“也似的”、“似價”、“也似價”、“也似價的”等の数種の用法が見られる。『兒女英雄伝』ではこのうち“價”に係わるものとしては、“的”に替わって“價”を用いる“似價”の用法と、“似”と“的”の間に“價”が挿入された“似價的”の用法の二種類があり、併用されている。<sup>2)</sup> 修飾語としては、状語と定語の両方の用法がある。

#### 1. 3. 3. 1. 状語の接尾成分となる用例

状語の後ろに置かれ、“似價”の形をとる。

例：把個不曾奉憲查收的新工，排山也似價坍了下來。(2)

(そのまだ検査もすまない新しい工事が、山を押し分けるように崩れてしまったのでした。)

例：只見兩邊舖面排山也似價開着，大小客店也是連二併三。(11)

(両側の店舗が、山を押し分けるようにずらりと並んでいて、大小の宿が何軒も軒を連ねています。)



例：當下早有僕婦丫鬟鋪下紅氈子，仍是晉升家的、隨緣兒媳婦扶着那張姑娘，便在紅氈上插燭也似價拜了四拜。(12)

(時を移さず女中たちが早くも赤い絨毯を敷いてありましたので、そのまま晋升の母親、随縁児の嫁が金鳳を支え、赤い絨毯の上で蠟燭を立てるように四回お辞儀をしました。)

例：只那姨奶奶帶了兩三個婆子照料，幾個村童來往穿梭也似價伺候，倒也頗為簡便，且是乾淨。(15)<sup>3)</sup>

(九公の奥さんが二、三人の女中を連れて世話をし、何人かの村の子供も織機ひの梭のように頻繁に行き交って仕えており、とてもシンプルで、きれいでした。)

例：“向我搗蒜也似價磕了陣頭，就待告退。”(16)

(「私に対して大蒜にんにくをつぶすように暫く頭を叩きつけてから、下がりました。」)

例：大家暴雷也似價答應一聲，連忙退出去。(21)

(皆、激しい雷のような大声で答えて、すぐ下がりました。)

例：言還未了，只聽腦背後暴雷也似價一聲道：(6)

(話が終わらないうちに、後で激しい雷のような声でこう言うのが聞こえました。)

次の二例は、状語の後に置かれ、“似價” + “的”の形をとる。

例：忽然來了個知疼着熱的世交伯母，一個情投意合的義姊，一個依模照樣的義妹，又是嬾嬾媽、嬾嬾妹妹，一盆火似價的哄着姑娘。(20)

(突然、親身になってくれる先代から付き合いのある伯母様や、気の合う褚一官の女房、自分に瓜二つの玉鳳や、更に婆やや婆やの娘までが現れて、火のように非常に暖かく玉鳳に声をかけてなだめています。)

例：“講到買幾片瓦子，也不值得打狼也似價的去這麼一大羣，”(32)

((鄧九公はこう言いました。))「瓦を何枚か買うと言うなら、狼を狩るように大勢で群れをなして行く必要もないだろう。))

### 1. 3. 3. 2. 定語の接尾成分となる用例

定語の後に置かれ、“似價” + “的”の形をとる。

例：只見他打半截子黑炭頭也似價的鬚角子，擦一層石灰牆也似價的粉臉，點一張豬血盆也似價的嘴唇，(7)

(その女は、半きれの黒炭のように黒い鬚を描き、一層の石灰を塗った壁のように顔を白く塗り、一枚の豚の血の入った大皿のように唇に真っ赤に紅をさしています。)

例：鑊子邊上擱着一把一尺來長潑風也似價的牛耳尖刀。(5)

(銅製のたらいの縁に、一尺あまりのスパッと切れそうなあいくちが置かれています。)

例：張太太也說：“二位姑奶奶罷呀，他這望後來也會那紅紙二房也似價的咧！”(40)

(張家の奥さんも「奥様方、もういいですよ。彼女もこれから側室のような立場になれるのだから！」と言いました。)

#### 1. 4. 副詞の接尾成分となる用例

副詞に直接接尾する用例は少ない。

##### 1. 4. 1. 1. “不時價”

例：怎禁得起師老爺那張嘴不時價的把他刁在嘴裡呢！(37)

(程先生のあの[汚れた]口が、しょっちゅう象牙のキセルの吸い口を<sup>くわ</sup>銜えるのを、どうして[吸い口が]耐えられるということがありましようか！)

#### 1. 5. 一定の範囲を示す表現の接尾成分となる用例

##### 1. 5. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

“價”が一定の範囲を示す表現の後に置かれた場合、範囲がその全体に及ぶことを強調する語気を持つ。「～じゅう」、「～全体」の意味を表す。いずれも叙述文(地の文)に用いられる。『兒女英雄伝』においては、「時間」を表す語の接尾成分となる用例しか見られないが、他の資料には、「場所」を表す語の接尾成分となる例もみられる。

##### 1. 5. 1. 1. “毎日價”

例：毎日價醫不離門，藥不離口，把個安太太急得燒子時香，吃白齋，求籤許愿，鬧得寢食不安。(1)

(来る日も来る日も、医者から離れることができず、薬を口から離すことができず、とうとうあの安の奥様が焦るあまりに、線香を焚いて神様にお祈りしたり、生臭を断つたりして、寝るのも食べるのも落ち着きません。)

##### 1. 5. 1. 2. “整夜價”

例：一為難，給擱在公中，就在那可西可東的一間堂屋裡坐下，長篇大論，整夜價攀談起來了。(31)

(困ってしまって、公平を期し、あの西と東をつなぐ部屋に座って、延々と一晩中雑談をし始めました。)



1. 5. 1. 3. “成日家”

例：這位親家太太成日家<sup>4)</sup> 合舅太太一處盤桓，也鍊出嘴皮子來了，(33)

(この張家の奥さんは、ひがな一日、佟夫人と一緒に過ごしているので、口が達者になってきました。)

1. 6. 否定・禁止の語の接尾成分となる用例

“價”が否定・禁止の語の接尾成分となる用例は、全て会話文中に用いられる。

1. 6. 1. 1. “別價”

例：又聽得一個蒼老聲音說道：“事情到了這裡，我們還是好生求他，別價破口。”(7)

(するともう一人の老けた声がかう言うのが聞こえました。「事ここに至っては、私たちは、やはりあの方によくお願いするしかないんだよ。そうがみがみ言うんじゃないよ。」)

例：他道：“你們這些人們都別價說了<sup>5)</sup>。”(21)

(張家の奥さんは言いました。「皆様方、もう言ってくださいますな。」)

例：張太太忽然接上話了，說：“姑奶奶，你好好兒的合他說，別價合他着急掰臉的<sup>6)</sup>！”(26)

(張家の奥さんは、突然話を受け取って言いました。「奥様、お前様はよくお嬢様にお話して、決してお嬢様を責め立てたりするんじゃないありませんよ！」)

例：張太太道：“別價睡了，完了那纂咧！”(27)

(張家の奥さんは言いました。「寝ないでくださいましよ。鬢がだめになってしましますよ！」)

例：他那裡還拉着何小姐說：“姑奶奶，你這是咱兒說？你留我多吃幾年大米飯罷，別價儘着折受我咧！”(29)

(張家の奥さんは、そこでまだ玉鳳を引っ張って言いました。「奥様、何をおっしゃいますやら。私にもう何年もご飯を食べさせてくださったというのに。どうか、私の寿命が縮まるような勿体ないことをするのはおやめ下さいまし！」)

1. 6. 1. 2. “不用價”

例：張太太聽了，擺着手兒扭過頭去說道：“姑奶奶，你不用價讓我，我可不吃那飯哪。”(21)

(張家の奥さんはそれを聞くと、手を振り顔をそむけて言いました。「奥様、私に勧めなくて結構ですよ。私はそのご飯を食べませんから。」)

1. 6. 1. 3. “不是價”

例：親家太太道：“不是價。……！這燒香可是神佛兒的事情，公修公得，婆修婆得，偌各人兒洗臉兒各人兒光，你不要可行不的！”。(13)

(張家の奥さんは、「それは違います。(中略) 御焼香となるとこれは、神様仏様のことで、夫は夫、妻は妻と、自分の功德は自分に返ってくるものなのですから、受け取らないというのはいけません！」と言いました。)

1. 6. 1. 4. “沒有價”

例：只見那老婆兒連連搖手說：“受他甚麼作踐，倒沒有價。”(7)

(そのお婆さんは手を振り続けて、「そいつに何かされるということは、ございませんでしたとも。」と言いました。)

例：他又接上話了，說：“沒有價，就我一個兒，我叫二頭。”(15)

(彼女はまた話を続けて、こう言いました。「他に [妻は] いませんわ、私一人です。私は後妻というんです。」)

例：張太太道：“沒有價。雞叫三遍就忙着往這裡趕，我那吃飯去呀？”(21)

(張家の奥さんは、「食事をするなんてとんでもない。一番鳥が三遍鳴いたら、すぐに馳せ参じたのですから、私はごはんを食べるところではありませんでしたよ。」と言いました。)

例：他又縳着眉連連搖頭說：“沒有價，沒有價。”(21)

(張家の奥さんは眉をしかめ、しきりと首を振って、「[具合なんか] 悪くない、悪くない。」と言いました。)

## 2. 早期の用例

“價”は、早期の作品において“介”、“假”、“家”、“加”と様々な漢字で表記される。用例としては、下記のようなものが確認される。<sup>7)</sup>

### 2. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例

#### 2. 1. 1. 「不定の時間量」の接尾成分

例：千峯雲起，驟雨一霎時價。更遠樹斜陽，風景怎生圖畫。『全宋詞』辛棄疾「醜奴兒」(博山道中效李易安體)(第3卷)

(千の峰に雲が湧いてきて、驟雨がほんの少しの間降りました。更に遠くの木に陽の光が斜めに差し込み、その景色はまるで一枚の絵のようです。)<sup>8)</sup>

例：追悔當初孤深願。經年價、兩成幽怨。『全宋詞』柳永 大石調「鳳銜杯」其2（第1卷）

例：百岁能欢几时价，可惜韶华过了他。『全元曲』馬致遠 散曲 套数「新水令・題西湖」

例：一会价上心来没是处，恨不得待跨鸾归去。<sup>9)</sup>『全元曲』馬致遠 散曲 小令「寿陽曲」

例：豁的一会价精细，烘的半晌又昏迷。『全元曲』無名氏 散曲 套数「賞花時」

例：几年假，为拐儿，是人都理会得我名儿。『全元曲』高明 劇文「蔡伯喈琵琶記」第25出

## 2. 1. 2. 「固定的な数詞+量詞」の接尾成分

この用例の数詞は、“一”以外の他の数詞に入れ替えることはできない。

例：（正末唱）你一番价探望哥哥吃的来醺醺醉，你一番价见嫂嫂常只是冲冲气。『全元曲』無名氏 雜劇「神奴兒大鬧開封府」第1折

（おまえはひとたび兄を訪ねてはふらふらするほど飲んだくれ、ひとたび義理の姉上に会えばぶんぶん怒るばかり。）

例：你东，我西。一番价有钞一番睡，旋打算旋伶俐。『全元曲』宋方壺 散曲 套数 一枝花 妓女

## 2. 1. 3. 「連続する数詞+量詞」の接尾成分

「連続する数詞+量詞」の後に“家”が置かれ、概数（原文：“估量”）を表す。

例：“我浑攢下到六七斤家麻，四五斗家粟。”『全元曲』馬致遠 雜劇「半夜雷轟薦福碑」第1折

（私は全部で麻は六、七斤ほど、粟は四、五斗ほどを蓄えた。）

このような用例に対して、『元曲釈詞』（第2巻，p.132）は“数量的估量”（原文）と解釈する。更に、この他に“光景的估量”（原文）として、次の例を挙げて解説する。“唐・李商隱<<寄惱韓同年二首>>之二：‘龍山晴雪鳳樓霞，洞裏迷人有幾家！’ 這是他寄給韓同年詩，時韓住在蕭洞，故詩意是說，住在蕭洞裏，有多少賞心樂事和迷人之景呵！看來，李詩張曲，修辭造句，前後如出一轍。”（原文）

このような概数の表現は、『兒女英雄伝』や他の白話小説には確認できない。

## 2. 2. 「大小や盈満を表す形容詞+名詞」構造の接尾成分となる用例

例：“你慌做什么？大瓮家釀着酒哩！”『全元曲』劇文 高文秀「須賈大夫諍範叔」第1折（「何を慌てているのですか？大きい甕いっぱい酒を作っているのですよ！」）

例：酒來後，滿盞家沒命飲，面磨羅地甚情緒，喫著下酒，沒滋味兒似泥土。『董解元西廂記』（「董解元搗彈本」1本57葉）<sup>10)</sup>

## 2. 3. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

### 2. 3. 1. 「名詞」の接尾成分

“價”が直接名詞の後ろに置かれ、「～のような」という意味を表す。

例：誰能事音律、焦尾蔡邕家。『全唐詩』132卷 李頎「題僧房雙桐」

(誰が音調を判断できましようか、桐の焼ける音を聞いて音調を解した蔡邕のように。)

この用例に対して『元曲釈詞』は、“言聽焦桐響而辨音律，誰能像蔡邕一樣啊！”(原文)と解説する。ほかに唐、宋の用例として、“宋・王安石<<送張宣義之官越幕>>詩：‘誰謂貴公子，乃如寒士家？’の例を挙げ、“意云誰說貴公子，竟像寒士一般。上面‘家’字，都不能解釋做‘人家’之‘家’。”(原文)として、“家”を“一樣”、“一般”に等しいものと解釈する。

## 2. 4. 副詞の接尾成分となる用例

例：“到今日三百口的冤魂，方才家自有主。”『全元曲』 紀君祥 「冤報冤趙氏孤兒」第4折  
(今日に至り三百人の怨霊は、やっとおのずから靈魂の拠所を得ることが来る[浮かばれる]というものです。)

## 2. 5. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

### 2. 5. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

例：“終日價没人商量。”『宣和遺事』(前集)

(一日中買い手がつきませんでした。)

例：“一夜家無眠白日盹。”『西廂記』(「董解元搗彈本」1本118葉)

(一晩中寝むれず、昼間うとうとしています。)

例：“鎮日家貪酒迷花。”『西廂記』(「董解元搗彈本」1本118葉)

例：“雪後雨兒雨後雪，鎮日價長不歇。”『全宋詞』第2卷 楊無咎「天下樂」

### 2. 5. 2. 「数詞+量詞」の接尾成分

ある事態や様子、音などが、一帯にたち込めている情景、全体を占めている状態を表す。この用例の数詞は“一”以外の他の数詞に入れ換えることが出来ない。

例：哥哥比兄弟多一片家狠心腸。『全元曲』 蕭德祥 「楊氏女殺狗勸夫」楔子

(兄には弟よりも凶悪な気性を隠し持っています。)

### 3. その他の近代漢語白話資料にみられる“價”・“家”・“假”

以下、各資料にみられる“價”の用例を挙げる。

#### 3. 1. 『三国演義』

3. 1. 1. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 1. 1. 1. 場所を表す語の接尾成分

例：兩馬相交，鬥不數合，後面李肅軍到，竟天價放起火來。(5)<sup>11)</sup>

(兩将馬が一騎打ちで戦いを交えましたが、数合も対戦しないうちに、後方から李肅の軍隊がやって来て、空全体を焦がすように火をかけ始めました。)

#### 3. 2. 『水滸伝』

特に直喩表現の接尾成分となる“價”の用法に関して、最も種類が豊富なのは『水滸伝』である。そこで相対的に用法全体の種類が多い『儿女英雄伝』と対照すると、『水滸伝』には「量を表す語」と「否定・禁止の語」の接尾成分となる用法が見られない。香坂(1987, p.480)は、「『水滸伝』では、“價”を持つ語は状語を表す助詞としてしか働かない。しかも、“價”の附加を許容する語の一定の範囲が“地”にくらべひときわせばまっているという消極的特徴がある」として、その働きが主に状語に接尾される構造助詞に相当する用法に限られていたことを指摘している。<sup>12)</sup>

3. 2. 1. 「大小や盈満を表す形容詞+名詞」構造の接尾成分となる用例

例：腰間拔出大斧，砍開猪羊，大塊價扯將下來吃。(73)

(腰に挟んでいた大斧を拔出して、豚や羊を切り裂いて、大きい塊に引きちぎって食べました。)

例：店主人便去打兩角酒，大碗價篩來，教武行者吃，將一碟熟菜與他過口。(32)

例：酒把大碗來篩，不奈煩小盞價吃。(38)

3. 2. 2. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 2. 2. 1. 動賓構造の接尾成分

例：婆子看了，口裏不住聲假喝采道：“好手段！老身也活了六七十歲，眼裏真個不曾見這般好針線！”(24)

(婆さんは見ると、立て続けに声を上げて褒めそやしてこう言いました。「素晴らしい腕前ですよ！わしは六七十歳まで生きてきて、こんな上手なお針仕事は本当に見たことがないですよ！」)

例：點着那兩邊柴草堆裏，一齊火起，火炮震天價響。(118)

(兩側の柴や草の山に火をつけると、一齊に燃え上がり、大砲は天を揺るがすほどに鳴り響きました。)

例：則見廟裏的看官如攪海翻江相似，迭頭價喝采。(74)

例：張順攢下水底，拔出腰刀，只顧排頭價戳人，都沉下去，血水滾將起來。(77)

例：把那金剛腳上打了兩下。只聽得一聲震天價響，那尊金剛從臺基上倒撞下來。(4)

例：正在西山邊氣忿忿的，又聽得東山邊鑼聲震地價響。急帶了人馬又趕過來東山邊看時，又不見有一個賊漢，紅旗都不見了。(34)

例：只見芒碭山上有三二十面鑼聲，震地價響；三個頭領一齊來到山下，便將三千餘人擺開。(60)

### 3. 2. 2. 「成語・熟語」の接尾成分

例：不多時，只見街上鑼鼓喧天價來。(62)

(暫くすると、通りから太鼓や銅鑼が天まで届かんばかりの音を立ながら近づいて来ました。)

例：李逵正在江裏探頭探腦假掙扎汙水。(38)

例：宋江因見魚鮮，貪愛爽口，多吃了些，至夜四更，肚裏絞腸刮肚價疼，天明時一連瀉了二十來遭，昏暈倒了，睡在房中。(39)

例：每日有那一般打散，或有戲舞，或有吹彈，或有歌唱，賺得那人山人海價看。(51)

例：李逵在外面聽得堂裏哭泣，自己磨拳擦掌價氣。(52)

例：石秀在廳前千賊萬賊價罵，廳上眾人都唬呆了。(63)

### 3. 2. 2. 3. “似(～)價”の形をとる状語の接尾成分

例：早見宋江軍馬撥風也似價來。(63)

(早くも宋江の軍隊が風のように押し寄せて来るのが見えました。)

例：說起鎗棒武藝，如糖似蜜價愛。(49)

(鎗棒の武術については、砂糖や蜜の如く愛好しました。)

例：今春去到鎗竿嶺北邊，盜得一匹好馬，雪練也似價白，渾身並無一根雜毛，頭至尾長一丈，蹄至脊高八尺。(60)

例：只聽耳朵邊風雨之聲，兩邊房屋樹木一似連排價倒了的，腳底下如雲催霧趨。(53)



3. 2. 2. 4. 名詞連語の接尾成分

例：那馬渾身墨錠似黑，四蹄雪練價白，因此名為踢雪烏騅馬，日行千里。(54)  
(その馬は体中が墨のように真っ黒で、四つの蹄は練絹のように真っ白なことから、踢雪烏騅馬 [雪を蹴る黒い<sup>あしげ</sup>茸毛の馬] と名付けられ、一日に千里も走りました。)

例：正猶豫間，只聽得梁山泊頂上號砲連珠價響。只見四分五落蘆葦叢中，鑽出千百隻小船來。(80)

3. 2. 2. 5. 重畳形式の接尾成分

例：兩勢下火起，草屋焰騰騰地價燒起來。(80)  
(二方から火の手が上り、草葺きの棟がメラメラと燃え始めました。)

3. 2. 3. 副詞の接尾成分となる用例

例：石秀看了，只暗暗地叫苦，悄悄假問老人道：“這個拿了的是甚麼人？”(47)  
(石秀は見ると、ただ内心悲鳴を上げながら、こっそりと老人に聞ききました。「あの捉えられたのはどのような人ですか？」)

例：把獵戶排頭兒一味價擄將去，那三十來個土兵都被擄死了。(43)

3. 2. 3. 1. “價”が“地”に代替する用例

例：五軍比及要退，又值天晚，只聽得四下裏火炮不住價響，宋江軍馬不知幾路殺將來。(78)  
(全軍が撤退しようとした時、折しも日暮れ時、四方から大砲がひっきりなしに鳴り響くのが聞こえたかと思うと、幾軍とも知れぬ宋江の軍隊が襲いかかってきました。)

3. 2. 4. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 2. 4. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

例：又有那一等小百姓們，一日價辛辛苦苦掙扎，早晨巴不到晚。(45)  
(またそのような庶民達は、一日中苦勞してどうにかこうにか持ち堪えるありさまなので、朝からその日の暮れるのを待ち焦がれています。)

3. 2. 4. 2. 「場所」を表す語の接尾成分

例：湊巧風緊，刮刮雜雜地火起，竟天價燒起來。(6)  
(丁度風が強かったため、ごうごうと火が燃え上がり、やがて空全体を焦がし始めました。)

例：開話又唱，唱了又說，合棚價眾人喝采不絕。(51)

例：且說高廉每夜在城中空闊處堆積柴草，竟天價放火為號，城上只望救兵到來。(53)

### 3. 3. 『金瓶梅詞話』<sup>13)</sup>

#### 3. 3. 1. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

##### 3. 3. 1. 1. 動賓構造の接尾成分

例：婆子看了，口里不住声假喝采道：“好手段！老身也活了六七十岁，眼里真个不曾见这个好针线！”(3)

(婆さんは見ると、立て続けに声を上げて褒めそやしてこう言いました。「素晴らしい腕前ですよ！わしは六七十歳まで生きてきて、こんな上手なお針仕事は見たことがないですよ！」)

#### 3. 3. 2. 副詞の接尾成分となる用例

例：逐日家迎宾待客，一家儿吃穿全靠着奴身一个。(50)

(来る日も来る日も客をもてなして、一家の生活は全て私一人にかかっているのです。)

### 3. 4. 『古今小説』

#### 3. 4. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例

##### 3. 4. 1. 1. 「固定的な数詞+量詞」の接尾成分

例：陳大郎道：“怎么不买。”兩箇又論了一番價。(1)

(陳大郎は「どうして買わないことがあるか。」と言いました。二人はまた暫く値段の掛け合いをしました。)

### 3. 5. 『警世通言』

#### 3. 5. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例

##### 3. 5. 1. 1. 「不定の時間量」の接尾成分

例：一陣價起底是秋風，一陣價下底是秋雨。(37)

(ひとしきり秋風が吹いたり、ひとしきり秋雨が降ったりします。)

例：期人在燈前相待，幾回價又恐燕鶯猜。(38)

#### 3. 5. 2. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

##### 3. 5. 2. 1. 動賓構造の接尾成分

例：老尼淨了手，向佛前念了血盆經，送湯送水價看覷鄧夫人。(11)

(年老いた尼は手を清め、仏前に向かって血盆経を唱えてから、お茶などを出して鄧夫人を伺い見ました。)

3. 5. 3. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 5. 3. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

例：想教授毎日價費多少心神。(14)

(先生は毎日毎日どれほどの気力を費やして教えているのでしょうか。)

3. 6. 『醒世恒言』

3. 6. 1. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 6. 1. 1. 動賓構造の接尾成分

例：被眾強盜刀砍斧切，連排價殺去。(36)

([下男達は] 強盗達に刀や斧で切りつけられ、次から次へと殺されて行きます。)

3. 6. 2. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 6. 2. 1. 「数詞+量詞」の接尾成分

いずれも「“整”+数詞+量詞」形式の後に“價”が置かれる。「～を丸々、全部」という意味を表す。

例：他自幼行善，利人濟物，兼之慕仙好道，整千貫價布施。(38)

(彼は幼い時から施しをしたり、他人のために尽くして救済を行い、その上更に神仙の道を慕っていたので、千貫にものぼる金をそっくり喜捨したりしました。)

例：又有一等人，自己親族貧乏，尚不肯周濟分文，到得此輩募緣，偏肯整幾兩價布施，(39)

3. 7. 『拍案驚奇』

3. 7. 1. 「大小や盈満を表す形容詞+名詞」構造の接尾成分となる用例

例：老道自家大碗價喫，不多時大醉了。(24)

(僧は自分の大きな碗で飲んで、すぐに大いに酔ってしまいました。)

例：這尹三店中是有名最狠的黃燒酒，正中其意，拿大碗價篩來喫。(14)

例：只見丁戌一頭自打，一頭說盧疆的話，大聲價罵。(14)

例：二人都是酒徒，見他如此殷勤，一發喜歡，大碗價只顧喫。(19)

例：鍊生見說得快活，放開了量，大碗價喫。(32)

3. 7. 2. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 7. 2. 1. 成語・熟語類の接尾成分

例：深夜昏黑，山門緊閉，沒處叫喚，只得披著濕衣，三人搥胸跌脚價叫苦。(22)

(夜中で真っ暗であり、山門は閉まっけていて、叩き起こしようがないので、やむなく濡れた服を着たまま、三人は拳で胸を叩き地団駄を踏んでくやしがりしました。)

例：睡夢之中，忽聽得天崩地裂價一聲响亮，元來那株？（22）

例：兩個自道佳人才子，一雙兩好，端的是如魚似水，如膠似漆價相得。（16）

### 3. 7. 2. 2. 擬態語・擬声語表現の接尾成分

例：女巫將着九環單皮（鼓）<sup>14)</sup> 打的廝琅琅價響，燒了好幾道符。（39）

（巫女はこの九つの環の付いた団扇太鼓をジャンジャンと叩き、いく枚ものおふだを燃やしました。）

例：一心想著吳氏日裡光景，且把道童太清出出火氣，弄得床程格格價響。（17）

例：虛心病發，曉得是兒子做出來，驚得面如土色，心頭丕丕價跳，口裡支吾道：（36）

例：正急得沒出豁，只聽得林間樹葉窸窣聲響。（4）

### 3. 7. 3. 副詞の接尾成分となる用例

例：老和尚不揣，恨命價弄送抽拽，<sup>15)</sup>（26）

（年老いた僧は自らを顧みず、死に物狂いで襲いかかっています。）

### 3. 7. 4. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

#### 3. 7. 4. 1. 「数詞+量詞」の接尾成分

ある状態がその範囲の辺り一帯にたち込めている情景などを表す。この用例の数詞は“一”以外の数詞に入れ換えることが出来ない。

例：眾人一齊敲着板屋吶喊，也有把馬鞭子打在板上，振得一片價響。（5）

（皆一斉に板葺きの家の壁板を叩いて大声をあげて叫び、中には馬の鞭を振って板を叩いて、鞭を振ることでヒュッと音を響かせた者もいます。）

例：把滿堂竹片盡撇在地，震得一片價響。（14）

例：達生連忙開了大門，就把掛在門內警夜的鑼摔在手裡，篩得一片價響，口中大喊：（17）

### 3. 8. 『二刻拍案驚奇』

#### 3. 8. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例

##### 3. 8. 1. 1. 「不定の時間量」の接尾成分

例：可見世間鬼附生人的事極多，然只不過一時間事，沒有幾年價竟做了生人與人相處的。（13）

（世の中には霊が生身の人間に取り付くことは極めてよくあることですが、一時的なことに過ぎません。何年もの間に亘って、霊が生身の人間に取り付いて普通の人間と生活を共にすることはないのです。）

3. 8. 2. 「大小や盈満を表す形容詞＋名詞」構造の接尾成分となる用例

例：一聲求罷，就被竇二大碗價罰來。(9)

(一言頼むと、すぐに竇二によって大きな碗で罰を与えられました。)

3. 8. 3. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 8. 3. 1. 動賓構造の接尾成分

例：一直到了孝堂，看見靈幃，果然唳天倒地價哭起來，也是孩子家天性所在。(10)

(まっすぐに葬儀の祭壇を置いた部屋に来て、霊堂の引き幕を見ると、やはり泣いて天地がひっくり返るほど大声で泣き出しました。これも子供としてのあるべき様なのです。)

3. 8. 3. 2. 擬態語・擬声語表現の接尾成分

例：咬得牙齒格格價響，大喊一聲道：“罷了我了！”(18)

(歯をグーツと喰いしばって、大声で叫びました。「もうだめです！」)

3. 8. 4. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 8. 4. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

例：大姐終久有這楊二郎在心裡，身子雖現隨著郁盛，畢竟是勉強的，終日價沒心沒想，哀聲嘆氣。(38)

(彼女はやはり心中では楊二郎を想っていて、今その身が郁盛の傍にあっても、所詮無理なことで、ひがな一日ぼんやりとしたり、悲しみや嘆きの声をあげたりしていました。)

3. 8. 4. 2. 「数詞＋量詞」の接尾成分

例：正行禮之時，忽聽得堂前一片價篩籮，像有十來個人喧嚷將起來，慌得小舅糕兒沒鑽處。(3)

(礼をしている時に、部屋の前から辺り一面に大声が聞こえ、十数人が喧嘩をし始めたようで、小舅糕兒は逃げ場がなく慌てました。)

3. 9. 『醒世姻縁伝』

直喩表現の接尾成分となる“價”の用法が僅かにあるが、そのほかに「否定・禁止表現の接尾成分となる“價”」の用例が多数見られることは、『醒世姻縁伝』が他の資料と大きく異なる特徴である。『儿女英雄伝』にも見られる“不是價”、“沒有價”の他に、“沒的家”の用例が非常に多く現れる。

『漢語方言大詞典』(p.2914)は、“沒的家”を山東方言に区分している。“冀魯官话。山东。(1) <代> 怎么。《醒世姻縁伝》第六十回：‘你老人家可是沒的家扯谈！你的外甥亲、如俺两口亲么？’(2) <副> 不必。第三十二回：‘你老七沒的家说！你吃你那饭吧，你嚼说我待怎

么？我往后只面红耳热的，都是你两口子念诵的。’”（原文）

一方、『兒女英雄伝』にも、“沒的”の用例はあるものの、“價”（若しくは“家”）の接尾した用例は確認できない。

3. 9. 1. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 9. 1. 1. 擬声語・擬態語表現の接尾成分

例：麻從吾發恨。咬得牙関刺刺價響，發咒要處置他師徒兩個。（26）

（麻從吾は怒り、ぎりぎり歯を噛み締め、彼ら二人をただではすまさぬと呪いました。）

3. 9. 2. 否定・禁止表現+“價”の用法用例

3. 9. 2. 1. “不是價”

例：那人道：“……。後來貼了張天師親筆画的符到了黑夜。那符希流刷拉的怪響，只說是那狐（精）<sup>16)</sup>被天師的符捉住了。誰想不是價，可是那符動慄。”（6）

（その人が言いました。「(中略) (その後、張天師が手ずから書いた護符を貼ると、真夜中になって、その護符にガサガサと奇妙な音が響いたので、狐の精が天師の護符に捕まえられたのだと思いました。誰がそうではないと想うでしょうか。ところが、その護符が動いていたのでした。)

例：童奶<sup>17)</sup>道：“不是價，另有話說，我待你叫還尋兩個灶上的丫頭，要好的，那儂辣脏丫頭不消題。”（55）

例：太<sup>18)</sup>道：“他只怕不光為禱頭他只怕是人我告免銀子。”任德前道：“不是價。他還拿着銀子來交哩。”（71）

3. 9. 2. 2. “沒有價”

例：素姐道：“我只待叫你出去通呈子，不希罕小春哥。他已是死了，我没有價兄弟了。”<sup>18)</sup>（74）

（素の姉さんは言いました。「私は、貴方に訴状を提出してもらいたいのです。小春兄さんは役に立ちません。あの人はもう死んでしまったので、兄弟は居なくなってしまったのですから。）」

3. 9. 2. 3. “沒的家”

『醒世姻縁伝』に禁止を表す“別家”（若しくは“別價”）はなく、“沒的家”を用いる。用例は多く十六例を見る。多くは後に動詞が置かれるが、第74、79回の例のように名詞が置かれる例も見られる。

例：晁夫人道：“你就沒的家說。可也要取個吉利。”（49）

（晁夫人は言いました。「お黙りなさい。縁起も担がなければなりませんよ。）」



例：素姐罵道：“小砍頭的！沒的家臭聲。”（74）

（素姐は罵って言いました。「この不埒ふらちものめ！でたらめはお止めなさい。」）

例：高氏道：“就沒的家說。（10）

例：高氏道：“老爹你就沒的家說。”（10）

例：衆人齊道：“您兩個就沒的家說！”（22）

例：晁夫人道：“你老七沒的家說。”（32）

例：高氏道：“沒的家放屁！”（13）

例：素姐說：“你老人家可是沒的家扯淡。”（60）

例：童奶ちやう罵道：“沒的家小婦臭聲。”（79）

### 3. 10. 『緑野仙踪』

三種類の用法がみられる。

#### 3. 10. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例

##### 3. 10. 1. 1. 「不定の時間量」を表す語の接尾成分

“經年家”

例：“經年家修橋補路，只各廟中布施也不知上着多少。”（18）

（長年に亘って橋をかけたたり道を直したり、各寺にどれほどの喜捨をしたか分かりません。）

例：他除了每月收柴之后半部，經年家不开廟門，四周都是极高的牆，虎豹入不去就罢了，总怕也说不得。（6）

例：于冰道：“也没什么道果，不过經年家登山涉水而已。”（15）

例：郭氏道：“……。一个杀人放火的大强盗，經年家养在家中，还要瞞神卖鬼的日日谎我。”（20）

例：桂芳道：“难道你經年家饿着不成？”于冰道：“果子或果干还间时用品。”（30）

#### 3. 10. 2. 副詞の接尾成分となる用例

“逐日家”

例：抱恨回来，逐日家悲悲啼啼，哭个不止。（25）

（恨みを抱えて帰ってきて、来る日も来る日もめそめそして、泣き止みません。）

例：欲临阵，又怕失机，越发人心动摇，坐守又非常计，逐日家长吁短叹，深恨秦尼。（34）

例：表弟逐日家狐朋狗友，弄出这样弥天大祸来。（37）

例：使用大钱的人心上甚是索然，逐日家眉头不展，要想一个生财的法子，复还原本，做吐气扬眉地方。（40）

例：话说温如玉自葬了他母亲后，谢了几天孝，诸事完毕，逐日家倒是清心寡欲。(43)

3. 10. 3. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 10. 3. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

“整天家”

例：严氏在家中每天不过吃一顿饭，常有整天家受饿，没饭吃的时候。(17)

(嚴婦人は家で毎日ご飯をせいぜい一度しか食べられません。いつも一日中飢えて、ご飯が食べられない時があるのです。)

例：你女儿的尸首，不是个整天家放着的；明日快与他寻副好些棺木，就看个日子，打发出去罢。(57)

“整日家”

例：又指苗秃道：“这个天杀的，不知整日家所干何事，自己忘记了也罢，还不和我说声。”(54)

(またハゲの苗を指さして言いました。「この馬鹿者めが、お前が一日中何していたかは知らないが、自分が忘れただけならまだしも、その上私に忘れた事を言わないとは。」)

“每日家”

例：每日家在外边种花养鱼，教他大儿子读书，连会试场也不下了。(35)

(毎日毎日、外で花を植えたり金魚を飼ったり、上の息子に勉強を教えたりして、試験場にさえ足を踏み入れなくなりました。)

例：因此往来的透熟；每日家言来语去，点缀严氏，着他卖身救夫，与富贵人家做个侧室，便可名利两收。(17)

“終日家”

例：且又最疲懒不过，终日家咬文嚼字，每夜念诵到三四更鼓，也还想要中会；(28)

([仕事に関しては]更に何もしない一番の怠け者で、ひがな一日文章の字句ばかりこだわって、毎夜夜中まで勉強し、その上試験までも受けたと考えています。)

“半晌家”

例：又抱住头在脸上咬住，半晌家不放，直咬得鲜血长流；(57)

(頭を抱えて顔に噛みつき、暫くの間放さず、鮮血がだらだらと流れるほどずっと噛み付いていました。)

### 3. 11. 『紅樓夢』

三十六例見られるが、前置成分の性質は一種類にとどまる。

#### 3. 11. 1. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

##### 3. 11. 1. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

指定する時間の一定の範囲全般にわたることを強調する。「～じゅう」、「～全体」の意味を表す。

“一年價”（一例）

例：“一年价难为你们，不行礼罢。”（53）

（「一年中あなた達に苦勞をかけたのだから、お辞儀などしなくて良いですよ。」）

“成年家”（三例）

例：“没见过你成年家只在我们队里搅些什么！”（32）

（「年がら年中私達の中にばかり居て何かと空騒ぎしているような方は見たことがございませんわ！」）

例：“奶奶惯会说这话。成年家大手大脚的，替太太不知背地里赔垫了多少东西，”（51）

例：太太跟前当些体统差事，成年家只在三门外头混，怪不得不知我们里头的规矩。（52）

“成日家”（二十一例）

例：“成日家说你的这玉，究竟未曾细细的赏鉴，我今儿倒要瞧瞧。”（8）

（「ひがな一日あなたのその宝石のことを話していましたが、そのくせまだじっくり鑑賞させて頂いたことがなかったので、今日こそはちょっと拝見させて頂かなくては。」）

例：凤姐道：“我成日家说你太软弱了，纵的家里人这样还了得了。”（7）

“成天家”（二例）

例：成天家疯疯癡癡的，说的话人也不懂，干的事人也不知。（66）

（「一日中気のふれたようなご様子で、おっしゃることも他人には理解できませんし、なさることも他人には分からないのでございます。」）

例：好好的成天家号丧，背地里咒二奶奶和我早死了，（69）

“每日家”（五例）

例：每日家偷狗戏鸡，爬灰的爬灰，养小叔子的养小叔子，（7）

（「毎日毎日、犬を盗み鶏と戯れ、灰の上を這う奴も這う奴 [舅と嫁が関係する隠語] だが、弟と関係を持つ奴も持つ奴だ。」）

“一日家”（二例）

例：宝玉一日家和我们姑娘好的蜜里调油，这时候总不见面了，（97）

（「宝玉様は一日中私たちのお嬢様と蜜の中に油を混ぜたように仲良くしていらっしゃいましたが、最近ではさっぱり顔をお見せにならなくなっていました。」）

例：“妙玉这个东西是最讨人嫌的。他一日家捏酸，见了宝玉就眉开眼笑了。（117）

“鎮日家”（一例）

例：宝玉亦发得了意，镇日家作这些外务。（23）

（宝玉はなおさら得意になって、ひがな一日これらの本分から外れた関係のないことをしています。）

“終年家”（一例）

例：“这些忘八羔子，一个都不在家！他们终年家吃粮不管事。”（93）

（「あの馬鹿者らめ、一人も屋敷に居らぬというのか！あいつらときたら一年中飯を食うばかりで仕事をしない。」）

3. 12. 『七侠五義』<sup>19)</sup>

3. 12. 1. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 12. 1. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

例：也没见这姓展的，太不知好歹，成日价骂不绝口。（56）

（この展のような人は見たことがありません、ほんとに事理をわきまえず、一日中悪口ばかり言っているのです。）

3. 13. 『九尾亀』

3. 13. 1. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 13. 1. 1. 擬声語・擬態語表現の接尾成分

例：直睡到午后方醒，已经听得明远楼上的号筒不住的呜呜价吹，吹手不住的吹打，（80）

（ずっと午後まで寝ていてやっと目が覚めると、もう明遠楼の信号のラッパがプーと鳴っているのが聞こえました。吹き手は止むことなく演奏しています。）

### 3. 14. 『八仙得道伝』

#### 3. 14. 1. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

##### 3. 14. 1. 1. 動賓構造の接尾成分

例：但听得震天价一声响，众人都吃了一惊。定神一看，大家还在钟离权堂上。(40)

(しかし天を揺るがすような音が聞こえたので、大勢の人々は皆驚きました。落ち着いて見てみると、皆はまだ鐘離堂に居ます。)

例：看看万分危急的当儿，忽然震天价的声响亮，宛如平空起了个霹雳。(12)

#### 3. 14. 1. 2. 成語・熟語類の接尾成分

例：还在那里指天划地价对众大骂，说话中间还句句带着老龙。(8)

(まだそこに居て言いたい放題人々に対して大いに罵り、話の途中ではことごとく龍さんのことを避難しました。)

例：一个小身体儿已被身后那东西驮了起来，腾云驾雾价凌空而去。(41)

例：已将他轻轻驮起，轰云掣电价腾空而起，一霎时飞入云雾之中。(42)

#### 3. 14. 2. 副詞の接尾成分となる用例

例：说罢，向众人一味价讪笑。(36)

(そう話し終えると、大勢の人に向かってひたすらあざけり笑いました。)

例：哪知道姑走得虽慢，沈氏拚命价追赶，兀自相差几步。(3)

例：并要拼出全力，牺牲自己，拼命价去干那观测乖谬的事情。(74)

“價”の“地”への代替もみられる。現代漢語<sup>20)</sup>では、“地”に相当する用法である。

例：那龙不住价叩头。(3)

(あの「龍」が絶えず地に頭を打ちつけています。)

### 3. 15. 『官場現形記』

#### 3. 15. 1. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

##### 3. 15. 1. 1. 動賓構造の接尾成分

例：这个挡里放了几门大炮，放的震天价响，众兵各归队伍。(6)

(この間に何発もの大砲が放たれて、天を揺るがすほど音が響くと、兵士は皆各自の部隊に戻りました。)

3. 15. 2. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 15. 2. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

例：其时各炮船船头上齐开大炮，轰轰隆隆，闹的镇天价响。(18)

(そのとき各砲艇のへさきから大砲が一斉に放たれました。物凄い規模と勢いで、騒々しく一日中音が鳴り響きました。)

例：就有报房里人，三五成群，住在他家，镇日价大鱼大肉的供给，就是鸦片烟也是赵家的。

(1)

例：正是五天一大操，三天一小操，镇日价旌旗耀日，金鼓齐鸣，好不齐整，好不威武。(6)

3. 16. 『孽海花』

3. 16. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例

3. 16. 1. 1. 「不定の時間量」を表す語の接尾成分

例：一会价，就日淡云凄，神号鬼哭起来。(23)

(まもなく、日が隠れて雲が湧き、物凄い音がし始めました。)

3. 16. 2. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 16. 2. 1. “如～家”の形をとる状語の接尾成分

例：这一套《花哥曲》唱完，满厅上发出如雷价的齐声喝采，震动了空气。(6)

(この「花哥曲」を歌い終わると、ホール中に一斉に雷のような喝采がして、空気を震わせました。)

例：只听如雷价一声呵殿，那一溜排衙，顿时蜿蜒蜒蜒的向前走动。(23)

3. 16. 2. 2. 名詞連語

例：只有战胜的捷报，连珠炮价传来，(28)

(戦争の勝利の知らせだけは、速射砲のように伝えて来ました。)

3. 17. 『老残遊記』

3. 17. 1. 量を表す語の接尾成分となる用例

①「固定的な数詞+量詞」の接尾成分

例：天上云气一片一片价叠起，只见北边有一片大云，(1)

(空に雲が一つずつ湧き出して重なり始め、北側には一つの大きな雲だけが見えます。)



3. 17. 2. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 17. 2. 1. 成語・熟語類の接尾成分

例：话说子平听得天崩地塌价一声，脚下震震摇动，吓得魂不附体，怕是山倒下来。(10)  
(さて子平は天が割れ地が崩れ落ちたような音を聞き、足元もグラグラ揺れていて、体から魂が抜けるほど驚き、山が崩れ出したのかもしれないと思いました。)

例：两人闷酒一替一杯价灌，(19)

3. 17. 2. 2. 擬態語・擬声語表現の接尾成分

この用例は『老残遊記』に突出して多く見られ、前置する擬声語・擬態語表現の種類も多種多様である。

例：人瑞“呼呼”价吃完。(12)  
(人瑞はフーフーと[吹いて]食べ終わりました。)

例：城上的人呼呼价往下跑。(14)  
(城の上の人たちはハァハァと[息を切らして]下へ走っています。)

例：那阁子旁边，风声“呼呼”价响，仿佛阁子都要摇动似的。(1)

例：那水鸟被人惊起，格格价飞；那已老的莲蓬，不断的绷到船窗里面来。(2)

例：只有一张大些的，悬空了半截，经了雪的潮气，迎着风“霍铎霍铎”价响。(6)

例：这里的人，又是冷，又是怕，止不住格格价乱抖，还用眼睛看着那虎。(8)

例：却听窗外远远“唔”了一声，那窗纸微觉飒飒价动，屋尘簌簌价落。(9)

例：方才坐下，只听外面“唔唔”价七八声，接连又许多声，窗纸却不震动。(10)

例：手指可以按放，亦复有宫商徵羽，不似巡街兵吹的海螺只是“呜呜”价叫。(10)

例：只见扈姑角声一阕将终，胜姑便将两手七铃同时取起，商商价乱摇。(10)

例：那后来的冰赶上他，只挤得“嗤嗤”价响。(12)

例：翠环坐在炕沿上，无事做，拿着弦子，崩儿崩儿价拨弄着顽。(12)

例：底下差役炸雷似的答应了一声‘嘎’，夹棍拶子望堂上一摔，惊魂动魄价响。(16)

例：却说翠环听了这话，不住的迷迷价笑，忽然又将柳眉双锁，默默无言。(17)

例：若替他办那事，自不费吹灰主力，一定妥当的，所以就迷迷价笑。(17)

例：朝里一窥，便揣到怀里去，说声“知道了”，更不住的嘻嘻价笑。(17)

例：吓的只格格价抖，带哭说道(18)

例：只听陶三爷把桌子一拍，茶碗一摔，“玳瑁”价一声响，(20)

3. 17. 2. 3. 動詞連語の接尾成分<sup>21)</sup>

例：仿佛山倒下来价响，脚下震震摇动。(9)  
(まるで山が崩れて来たような音がして、足元もグラグラと揺れています。)

3. 17. 2. 4. 重疊形式の接尾成分

例：只见那上流的冰，还一块一块的漫漫价来，到此地，被前头的拦住，走不动就站住了。

(12)

(上流の氷は、また一つ一つゆっくりと流れてきて、ここまで来ると、前のものに遮られて、動けなくなり止るのが見えました。)

例：只见天地一色，那雪已下的混混沌沌价白，觉得照的眼睛发胀似的。(7)

例：清爽异常，咽下喉去，觉得一直清到胃腕里，那舌根左右，津液汨汨价翻上来，又香又甜，连喝两口，似乎那香气又从口中反窜到鼻子上去，说不出来的好受。(9)

例：如质恶的，只好慢慢价熬，终久也是要活的。(20)

3. 17. 3. 副詞の接尾成分となる用例

例：一霎时，只见城外人，拚命价望城里跑；(14)

(瞬く間に、城外の人は、懸命に城内に向かって走るの見えました。)

例：一个跟班的戴个红缨帽子，膀子底下夹个护书，拚命价奔，一面用手巾擦汗，一面低着头跑。(2)

3. 18. 『老残遊記続集』

3. 18. 1. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 18. 1. 1. 擬態語・擬声語表現の接尾成分

例：“不是刑法，此三人已经在那里‘呱呱’价啼哭了。”(8)

(「刑罰ではありません。この三人は[生まれ変わって]もう既にあそこでオギャーオギャーと産声をあげ泣いています。)」

例：再看那玻璃窗外，正是一个山涧，涧里的水花喇花喇价流，带着些乱冰，玎玲琅琅价响，煞是好听。(1)

3. 18. 1. 2. 重疊形式の接尾成分

例：德夫人当真用鼻子细细价嗅了会子，(1)

(徳婦人は本気にして暫く鼻で注意深く嗅ぎました。)

3. 18. 2. “價”が“地”に代替する用例

例：看顾君一径让那三位吃酒，用大碗不住价灌，片刻工夫都大醉了。(8)

(顧君がひたすらあの三人に酒を勧め、大きな碗で絶えず飲ませたので、あつと言う間に彼らは泥酔しました。)

3. 19. 『老残遊記外編卷一（残稿）』

3. 19. 1. 様態・直喩表現の接尾成分となる用例

3. 19. 1. 1. 重畳形式の接尾成分

例：他便好好价拿手灯照着我，送到东洋车子眼前，（1）

（彼は十分に手提げランプで私を照らしてくれて、車の前まで送ってくれました。）

3. 20. 『雍正剣侠図』

3. 20. 1. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 20. 1. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

例：武云飞不但拿钱买通了何小三，成天价武爷长，武爷短，怎么使唤怎么成。（53）

（武雲飛は、金で何小三を買収したので、彼は一日中、武様さようごもっともでございますと、言い付けられた通りにします。）

3. 20. 2. 否定・禁止の語の接尾成分となる用例

例：“别价啊！你跟我们一块儿走。”（74）

（「止めてください！私たちと一緒に行きましょう。」）

例：“别价，咱们还是先骑骑它吧，你瞧，这还有个屌是人骑的。”（28）

例：他又要走，李昆拦住：“别价别价。走！你们都走！”（37）

例：林宝“扑通”一下就跪下了：“师父，您别价，这是我在您跟前撒娇哪。”（44）

例：“师大爷你别价，您还是饶了我得了。我哪能离开您哪！”（50）

例：“别价！正因为王爷会着客呢，才请你们爷儿几个来。快到上房去吧。”（51）

例：“唉，别价！师哥呀，我出个主意，这主意要答应了，……。”（63）

例：碧霞一想：“别价！搭不上去，就把我扣在这里，不见天日也不好受。”（73）

3. 21. 『官話類編』

3. 21. 1. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

3. 21. 1. 1. 「時間」を表す語の接尾成分

『官話類編』では、“家”を北方官話として表記する。<sup>22)</sup>

例：“我整年〔的/家〕就是〔好/愛〕替古人擔憂。”（108. 5）<sup>23)</sup>

（私は一年中それこそ余計な心配ばかりしています。）

例：“你〔整/成〕天家作甚麼。”（72. 1）

（あなたは一日中何をしていますのですか。）

例：“他們整天〔的/家〕，彼此吹毛求疵，〔歸真/究竟〕必鬧一場大〔漏/亂〕子。（127. 18）

例：“他們整天〔的/家〕，專以賭博為事。”（145. 3）

例：“他們〔整天的/成天家〕，不是和這個吵，就是和那個鬧，”（184. 19）

3. 21. 2. 否定・禁止の語の接尾成分となる用例

禁止の“別”の接尾成分となる用例も見られ、“別家”は北方官話として表記される。

例：“遮思克趕緊出來，着忙說，[別別別／別的別的／別家別家]，我愛這個地方，求你別叫看門的知道。”（82. 37）

（ジェシカはすぐ出て来て、慌てて言いました。「止めてください。私はここがとても好きなのです、門番に言わないでください。」）

3. 22. 老舎の作品

表記は、“成天際”、“整天際”など“際”の字を用いる。

3. 22. 1. 一定の範囲を示す語の接尾成分となる用例

“成天際”、“整天際”

例：她不准他晚上出去，也不准他好好的睡觉，他一点主意也没有，成天际晕晕忽忽的，不知怎样才好。（19）『駱駝祥子』

（彼女は彼が夜外出するのを許さず、十分に寝ることも許さないなので、彼はどうしようもなく、ひがな一日ぼうっとして、どうすればよいか分かりませんでした。）

例：一想到那个老者与小马儿，祥子就把一切的希望都要放下，而想乐一天是一天吧，干吗成天际咬着牙跟自己过不去呢？！（11）『駱駝祥子』

“整天際”

例：他是整天際在街面上的人，他晓得打架和打仗都必有胜有败，（31）『四世同堂』

（彼は一日中街を出歩いているので、喧嘩やグループのいさかいには勝ち負けが必ずあることを分かっています。）

例：个别的解决，祥子没那么聪明。全盘的清算，他没那个魄力。于是，一点儿办法没有，整天際圈着满肚子委屈。（10）『駱駝祥子』

#### 4. “價”に関する歴史的考察

##### 4. 1. 近代漢語白話資料にみられる“價”の用法

上記に挙げた“價”のうち用例が多岐に亘る作品の用法を下記（表1）に対照する。

（表1）

“價”の用法	書名 <sup>24)</sup>	兒	元	水	拍	二	醒	緑	老	雍	官
1. 量を表す語の接尾成分		+	+			+		+			
(1)不定の時間量		+	+			+		+			
(2)固定的な数詞+量詞		+									
(3)連続した数詞+量詞			+								
2. 「大小や盈満を表す形容詞+名詞」構造の接尾成分		+	+	+	+	+					
3. 様態・直喩表現の接尾成分		+	+	+	+	+	+		+		
(1)動賓構造		+		+		+					
(2)成語・熟語形式		+		+	+				+		
(3)“(也)似+價”		+		+							
(4)擬態語・擬声語					+	+	+		+		
(5)名詞連語				+							
(6)動詞連語									+		
(7)重畳形式				+					+		
(8)名詞			+								
4. 副詞の接尾成分となる		+	+	+	+			+	+		
5. 一定の範囲を示す表現の接尾成分		+	+	+	+	+		+		+	+
(1)時間		+	+	+		+		+		+	+
(2)場所				+							
(3)数詞+量詞			+	<sup>25)</sup>	+	+					
6. 否定・禁止の語の接尾成分		+					+			+	+

#### 4. 1. 1. “價”の機能

“價”の主な用法1から6を整理すると、語法上の機能を大きく三種類に分類することが出来る。一つめは、1から4の「状語や定語といった修飾語の接尾成分となり、現代漢語の“地”（極僅かだが“的”）のような構造助詞に近い役割を果たす」グループ。二つめは、5の「一定の範囲を示す時間や場所を表す語に接尾し、範囲全体に及ぶ『～じゅう』という意味を強調する現代漢語の“地”のような構造助詞に近い役割を果たす」グループ。三つめは、6の「否定・禁止表現に接尾し、現代漢語の強調の語気助詞に近い役割を果たす」グループである。最後の三つめのグループは、言い切りの形が存在し、必ずしも修飾語の接尾成分とならないことが、構造上、前者の二つとは異なる点である。

#### 4. 1. 2. “價”の表す意味

歴史的には、『全唐詩』132巻・李頎「題僧房雙桐」に“誰能事音律、焦尾蔡邕家。”として“家”の例が見られることから、基礎となる用法は既にこの頃の口語に既に存在していたとみられる。この最も早期の用例は、機能面では、他の白話小説に見られる様態・直喩表現の接尾用法に通ずるものと考えられ、「～の如く」、「～のような」という意味を表す。ただ、文の形式面では、このように名詞の後置成分となって、言い切りの形をとる用法は、その他の白話資料には現段階では確認されていない。形式的には、その後の白話資料では、これまで例を挙げたように様々な修飾語の接尾成分を形成する働きが主流となっている。

“價”は、元々、匹敵する相当とみなされる事物を挙げた語やフレーズに付いて、その様態や様子がどのようなものかを想定させる機能を持ち、そこから、動作や行為の行われる状況や様子が如何なるものか、説明したり設定したりする修飾機能に発展したものとみられる。1から4の用法は、基本的にこの意味上に連繋するものと考えられるが、更に、5の「時間・場所の一定の範囲を示す語」の接尾成分となる用法（例えば、“整天價”、“成日價”）も、この関連用法と捉えることが可能である。“價”が付くことで、その動作行為が行われる状況が、「一日相当」の状態であることを意味することから、「一日中」というニュアンスが加わるようになったのではないかと考えられる。

一方、6の「否定・禁止の語の接尾成分」となる用法は、副詞という修飾成分に接尾する働きがある点においては、1から5の語法上の機能に共通するものの、必ずしも被修飾成分を必要とせず、言い切りの形が存在する点、口語性が強く、話者の地域性・階層性に制約が見られる点において、用法上の明確な相違がある。

#### 4. 1. 3. 構造助詞との関係

本来、“價”は「ある様態、程度、範囲に匹敵、相当することを示す働きを持つ」ことから、状態（程度、時空間等を含む）を示す状語を作る“地”の機能と似た働き方をするようになり、やがて時代が下るにつれて、この状態を示す機能が一層中心的役割を占めるようになる。そのため、『水滸伝』では、“價”を取ってしまうと、文が成立しないような、明らかに“地”の役割を代替するような文法機能を果たす例文も多く見られる。（とはいえ、“地”



と完全に同じ機能を具えている訳ではない。) 更に、『兒女英雄伝』の頃になると、文法的な機能に混乱が見られ、“價”を外すと表現が不自然になる用例<sup>26)</sup>がある一方で、一文中に連続して“價”と“地”が併用されている用例もみられる。また、『兒女英雄伝』のほかに、『全元曲』、『水滸伝』、『八仙得道伝』、『老残遊記』では、副詞の接尾成分となる例がみられるだけでなく、『八仙得道伝』、『老残遊記続集』などでは、一つの副詞として扱われる“不住地”の代わりに“不住價”が用いられるなど、固定的な表現でありながら“價”が“地”の代替をしている例も現れる。

このほか『兒女英雄伝』においては、“似的”、“也似的”の助詞の用法に対して、“似價”、“也似價”の用法も併用されており、ここにも“的(地)”との混用が見られる。

#### 4. 2. 6種類の用法と近代漢語白話資料の関係

1から5に関しては、早期の『全元曲』から『兒女英雄伝』、『老残遊記』までその用法が広く確認された。ただし、その多くは3の「様態・直喩表現の修飾語の接尾成分となる用法」が中心的な役割を果たしている。

また、使用言語の地域性という観点から検証するため、『兒女英雄伝』に比較的成立年代の近い作品として、『官場現形記』、『孽海花』、『老残遊記』を対照すると、これらにも1、3、5に属する用法が現れる。各作品の作者(李宝嘉、曾樸及び金天羽、劉鶚)はいずれも江蘇省の出身であることから<sup>27)</sup>、この三種類の用法は方言地域が限定されるものではなく、白話資料に広く用いられた用法と考えられる。

2は、『兒女英雄伝』のほかに『水滸伝』、『拍案驚奇』、『二刻拍案驚奇』にも見られ、やはり地域性を限定することが出来ないが、『兒女英雄伝』を除いて清代の用例が現段階では確認できない。

4も、『兒女英雄伝』のほかに、『水滸伝』、『拍案驚奇』、『緑野仙踪』、『八仙得道伝』、『老残遊記』などに広く見られるが、用例数は少ない。

6の「否定・禁止表現+“價”」は、早期の用例には見られず、明代以降の北方方言で書かれた資料、『醒世姻縁伝』と『兒女英雄伝』の用例が大半を占める。それ以降のものとしては、『雍正侠剣図』に現われるが、いずれも北方方言で書かれた作品である<sup>28)</sup>。『官話類編』においても北方方言として類別されている。

#### 5. 特異的な“價”

近代漢語白話資料において、“價”の前置成分の種類が最も豊富に見られたのは『兒女英雄伝』であり、次いで、『水滸伝』、『二刻拍案驚奇』、『拍案驚奇』と続く。

基本的な前置成分は、

- 1類：量を表す語
- 2類：「大小や盈満を表す形容詞+名詞」構造の語
- 3類：様態・直喩表現



4類：副詞

5類：一定の範囲を示す語

6類：否定・禁止を表す語

であるが、『兒女英雄伝』の“價”はこれらの全ての分類を網羅している。

この中で、6類の否定・禁止を表す語の接尾成分となる“價”は、前項「4. “價”に関する歴史的考察」で述べたように、機能、意味、近代漢語白話資料における出現状況から、他の“價”の用法とは異質のものであるとみられる。以下では、この用法について『兒女英雄伝』の用例に基づき、更に詳しく検証する。

### 5. 1. 否定・禁止の語の接尾成分となる“價”

『兒女英雄伝』では、二種類の禁止、二種類の否定を表す語に、接尾成分として“價”が付く。例文については、既に述べたので、以下では、“價”を用いる場合と用いない場合にみられる表現上の相違、話者にみられる性質上の相違などを対比し、使用状況の区別を中心に検証する。

#### 5. 1. 1. “別價”と“別”の用法

##### 5. 1. 1. 1. “別價”五例

蒼老聲音（能仁寺の住職の妾）：“別價破口。”（7）

（「そうがみがみ言うんじゃないよ。」）

張太太：“你們這些人們都別價說了<sup>29)</sup>。”（21）

（「皆様方、もう言ってくださいますな。」）

張太太：“別價合他着急癩臉的啊！”（26）

（「彼女を責め立てたりするんじゃないよ。」）

張太太：“別價睡了，”（27）

（「寝ないでくださいましょ。」）

張太太：“別價儘着折受我咧！”（29）

（「どうか私の寿命が縮むような勿体ないことをするのはおやめ下さい。」）

##### 5. 1. 1. 2. “別”五例

華忠：“小爺，你只別着急，”（3）

（「若様、慌てないでください。」）

店主人：“客人，你別！”（3）

（「お客さん、[お金は] いいですよ。」）

公子：“別斟了，”（5）

（「もう注がないでください。」）

玉鳳：“別‘僭們’！你！”（7）

（「『私たち』はおやめ！ あんただけだろう！」）

安太太：“纔囑咐的話可別忘了。”（34）

（「先に言いつけておいたことを、忘れないでね。」）

#### 5. 1. 1. 3. “別價”と“別”の相違

用法上の差異：“別價”は、全て状語であり、言い切りの形で単独で使用される例がない。

“別”は、四例が状語として、二例が言い切りの形で使用されている。

意味上の差異：“價”の接尾によって、禁止の語気を強める。

ここで、“價”の性質を検証するために、もう一つの禁止表現“不要”の使用状況について触れる。太田（1988, p.338）は、「禁止するばあい、『兒女英雄伝』では、古白話系の“莫”、“莫要”、“標準語の“不要”等もあるが、口語的には“別”を用いる」と言う。“別”と“不要”は、いずれも現代漢語でも用いられており、禁止する場合、意味も用法も比較的近い。しかし、『兒女英雄伝』においては、この“別”と“不要”に関して、口語という区別のほかに、話者のある一種の階層が異なる傾向がみられる。

以下、『兒女英雄伝』の“不要”の用法を挙げ対照する。

#### 5. 1. 1. 4. “不要”の用法

副詞としての“不要”は用例が多く見られ、禁止を表す“別”との意味や使用頻度における特別な相違は確認出来ない。

尚、『兒女英雄伝』において“不要”に“價”が接尾する用法は見られない。

程師爺連忙說：“世兄，你且**不要**煩惱，等咱們大家慢慢計議出個道理來。”（3）

（程先生はすぐにこう言いました。「まあ、まあ、そう悩まないで。我々皆でゆっくり考えてみようではありませんか。」）

公子說：“不好，他准是笑我呢。**不要**理他！只是這門關不住，如何是好？”（4）

（若様は、「まずい、きっと私のことを笑っているのだ。あの女に関わってはいけない。とはいえこの戸が閉められないのをどうしたものか？」と言いました。）

公子“噯哟”了一聲，不由的就轉過臉去，口裡說道：“大師傅，我是失手，**不要**動怒！”

（5）

（若様は、「アッ」と一言、思わず住職を振り仰ぎ、言いました。「和尚様、手が滑りましたもので、怒らないで下さい！」）

那老婆兒（張太太）忙攔道：“兒阿，**不要**這樣，這位姑娘說的是好話。”（7）

（その婆さんは、慌てて言いました。「お前、そんなことではいけないよ。こちらのお嬢様が言ってくださっているのは、悪い話ではないんだよ。」）

顧先生說：“但我可是外行，公子**不要**見笑！”（18）

（顧先生は、言いました。「そうは言っても私は素人ですから、若様、見て笑わないでくださいよ！」）

5. 1. 1. 5. “價”と“別”及び“不要”の関係

会話文中においては、“不要”と“別”の使用頻度はほぼ同じである。使用状況については、『兒女英雄伝』では、安夫人と華忠（安家使用人）らが“別”を使う一方、程先生（学海様の旧友で、安公子の家庭教師）、顧先生（紀猷唐の家庭教師）らは、“不要”を使い“別”を使わない。また、安の若様、後にその妻となる十三妹こと玉鳳は、“別”と“不要”の両方を使用している（張家の奥さんも両方使用するが“不要”は極少数）。つまり、極めて教養の高い学識者として描かれている年齢の高い男性が“不要”を使う傾向が見られる。これに対して“別”は、女性や使用人のほか、また教養のある若い男性にも使用が見られ、口語性が強く更に相手の動作を阻止しようとする切迫感のあるシーンでの使用が見られる。この点において、“別”は語気を強調する“價”とは相性が良く、特に会話文中で住職の妾と張家の奥さんに“別價”の使用例がみられる。この二人は、“別”のみを用いる話者よりも、更に教養や地位の低い者として描かれている人物である。同時に“不要”と“價”の組み合わせは見られない。こうしたことから、この“價”は卑俗なイメージを持つ語として使用されたものと考えられ、『兒女英雄伝』では、話者の背景にある学識レベルの高さや切迫感の低さに沿って、“不要”→“別”→“別價”の順に使い分けがなされているとみられる。

5. 1. 2. “不用價”と“不用”の用法

“不用”には、“別”に相当する禁止の意味と、「必要がない」という意味の二種類の用法が見られるが、“價”が接尾するのは禁止の用法のみである。

5. 1. 2. 1. “不用價”一例

張太太：“姑奶奶，你不用價讓我，我可不吃那飯哪。”（21）

（「奥様、私に勧めないでください。私は本当にそのお食事を戴きませんので。」）

5. 1. 2. 2. “不用”十例

“別”と同じ禁止の意味で用いられるものは次の通りである。

十三妹（玉鳳）：“你不用在那盆裡洗手！”（9）

（「その盥で手を洗ってはだめよ！」）

褚大娘子：“不用問了。”（16）

（「聞かないでください。」）

舅太太：“姑娘，不用猶疑了，”（24）

（「玉鳳さん、ためらうことはないわ。」）

褚大娘子：褚大娘子笑着縹縹眉，道：“咳，不用喲！”（16）

（褚一官の女房が笑いながら眉を顰めて言いました。「ああ、もうやめてちょうだい！」）

華忠：“大爺不用着急，”（3）

（「若様、慌てないでくださいませ。」）

以下の用例では禁止の意味は弱く、「必要がない」という意味にとどまる。“價”の接尾はなされていない。

叙述：甯女工**不用**講，就那操持家務，支應門庭，真算得起安老爺的一位賢內助。(1)

(針仕事は勿論のこと、世帯を切り盛りして、一家をやりくりなさる、まさに賢妻と言えましょう。)

安老爺：“家裡的事，向來我就不大管，都是太太操心，**不用**我囑咐。”(2)

(「家のことは、これまでも大してかまうことなく、皆お前がやってくれたのだから、私が言いつける必要もない。」)

金鳳：“我知道姐姐此時已是千肯萬肯，**不用**妹子再絮煩。”(26)

(「お姉さまにご異存がないことは分かっております。私が更に煩く言う必要はありませんわ。」)

安太太：“這兩樁事都**不用**老爺費心，”(13)

(「その二件のことは、旦那様のご心配には及びません。」)

舅太太：“噯喲！**不用**姑老爺這麼操心了，”<sup>30)</sup>(40)

(「まあ！ 学海様、ご心配には及びませんよ。」)

#### 5. 1. 2. 3. “不用價”と“不用”の相違

用法上の差異：禁止を表す“不用價”は状語であり、言い切りの形で単独で使用される例がない。用例の数も一例だけである。ここでも、“價”の接尾した用法は、張家の奥さんが用いている。

意味上の差異：“價”の接尾によって、禁止の語気を強める。

#### 5. 1. 3. “不是價”と“不是”の用法

##### 5. 1. 3. 1. “不是價”一例

張太太：“**不是價**。這往後俺兩口子的吃的喝的穿的戴的，都仗着你老公母倆合姑爺哩，還有僮兒說的呢！這燒香可是神佛兒的事情，”(13)

(「それは違うというものです。これからは、私ども二人、食べる物、飲む物、着る物、身につける物まで、貴方様ご夫婦にお世話になるわけで、それはそうといったしましても、お焼香となりますとこれは神様仏様のことですから。」)

##### 5. 1. 3. 2. “不是”<sup>31)</sup>

安老爺：“**不是**，**不是**。我生平別無所好，就是好喝口紹興酒，”(15)

(「違います。違います。私は生来これと言って頓着しないものの、好物は唯一つ、紹興酒なのです。」)

晉升家的(晋升の女房)：“太太，**不是**。我們是家下人，當奴才的。”(12)

(「奥様、違います。私どもは召使で、奴僕をしている者でございます。」)

5. 1. 3. 3. “不是價”と“不是”の相違

用法上の差異：“不是價”は、言い切りの形で単独で使用される例しかない。ここでも、用例は会話文中の張家の奥さんの台詞である。

“不是”を言い切りの形で単独で使用する例は、あまり多く見られない。

意味上の差異：“價”の接尾によって、否定の語気を強める。

5. 1. 4. “沒有價”と“沒有”の用法

5. 1. 4. 1. “沒有價”四例

“價”が接尾する“沒有”には、現代漢語と同様の二種類の性質を確認出来る。その性質とは、a. 動作や状態の発生を否定する用法と、b. 動詞“有”を否定する用法である。<sup>32)</sup>

(1) 動作や状態の発生を否定する“沒有”に“價”が接尾する用法

三例見られる。前文で提示された内容について、まだその事態に及んでいないことを意味しているが、“沒有”の後に動詞や形容詞は続かず、“沒有價”で言い切りの形になっており、“沒有”の後ろにくるべき内容は省略されている。以下にその例を挙げる。

張太太：“沒有價。雞叫三遍就忙着往這裡趕，我那吃飯去呀？”(21)

(「食事など食べておりません。一番鳥が三遍鳴いたら、すぐに馳せ参じたのですから、ご飯なんて食べられましょうか。)」

張太太：張姑娘聽了，便問：“媽，你老人家既沒吃飯，此刻爲甚麼不吃呢？不是身上不大舒服阿？”他又繃着眉連連搖頭說：“沒有價，沒有價。”(21)

(金鳳は聞いて直ぐに問いただしました。「ねえ、母さんたら食事をしていないのに、この期に及んでなぜ食べないの？ 具合でも悪いんじゃない？」すると、張家の奥さんは、眉を擧めて頭を振り振り言いました。「[具合なんか]、悪くない、悪くない。)」

張太太：“受他甚麼作踐，倒沒有價。”(7)

(「そいつに何かされるということは、ございませんでしたとも。)」

北京人インフォーマント<sup>33)</sup>は、この用法は現在、北京語では使用しないと言う。

(2) 動詞“有”の否定を表す“沒有”に“價”が接尾する用法

一例見られる。

姨奶奶：“沒有價，就我一個兒，我叫二頭。”(15)

(「ほかに[妻は]いませんわ、私一人です。私は、後妻というんです。)」

5. 1. 4. 2. “沒有”

(1) 動作や状態の発生を否定する“沒有”の用法

二例見られる。この用法では、“沒有”が否定する動詞が後に続く。

叙述文：就考查過揚子《方言》那部書，那部書竟沒有載這句方言。(4)

(揚子の『方言』という本を調べてみても、その本にもこんな方言の言葉は、まだ載っておりません。)

安老爺：“果然沒有看見，只有一對孔雀在那裡。”(38)

(「やっぱり見られなかったのだ。一對の孔雀がそこに居ただけだったよ。」)

## (2) 動詞“有”の否定を表す“沒有”の用法

用例は大量にあることから、ここでは数例を挙げる。

帝釈天：“這都因漢高祖沒有兒女真情，枉作了英雄事業，纔遺笑千古英雄！”(0)

(「これは、漢の高祖[初代の天子]に儿女の真心がないことによるもので、いたずらに英雄の事業を行うこととなり、千古の英雄の笑いぐさになったのだ!」)

安老爺：“太太既同去，太太便沒有甚麼不放心了的；”(2)

(「お前も一緒に行けば、お前は心配することが何もなくなるというものだ。」)

金鳳：“你我作女孩兒的，沒一件事不得站住地步，也沒有句話該讓人，却也是個英雄豪杰的身分。”(26)

(「私たち娘と言うものは、全てのことに自分の立場をしっかりと守って、一言たりとも他人に譲らない、それでこそ英雄豪傑の沽券というものですわ。」)

### 5. 1. 4. 3. “沒有價”と“沒有”の相違

用法上の差異：“沒有價”は、全て言い切りの形で単独で使用される。

意味上の差異：“價”の接尾によって、語気を強める。

### 5. 1. 4. 4. “價”と“沒有”及び“沒”の関係

『儿女英雄伝』では、相対的に“沒”の使用が“沒有”より多いが、“價”が付くのは“沒有”だけで、“沒”に付く用例は見当たらない。なぜ使用頻度では劣る“沒有”にのみ“價”は後置成分となりうるのだろうか。

ここで、“沒有”と“沒”、更に“價”との関係について考えてみたい。

まず、“沒”と“沒有”の相違についてであるが、太田(1988, p.337)は、「(“沒”と“沒有”は)“未”の意味の否定副詞。『紅樓夢』や『品花宝鑑』では、どちらも用いるが、『儿女英雄伝』では、“沒”に限られ、“沒有”は例外と認むべきである。筆者が検出し得たのは、2例にとどまる。『紅樓夢』では、テキストにより差異のあることが多い。我沒說什麼。(紅26. 12)<sup>34)</sup>、方纔的戲都沒唱完。(品花宝鑑25回)、那石頭風絲兒也沒動。(児4. 22)、那部書竟沒有載這句方言。(児4. 20)、果然沒有看見，只有一對孔雀在那裡。(児38. 51)なお、『小額』では、“沒”のみを用い、“沒有”はない。『北京』では、“沒”が多く、“沒有”はきわめて稀。“未”の意味に“沒”を用いるのは旗人語ではあるまいか。」と解している。



太田氏が『兒女英雄伝』における例外的用例として挙げた“未”の意味を持つこの“沒有”の二例は、本稿前述5. 1. 4. 2. (1)に「動作や状態の発生を否定する“沒有”」の用例として挙げたものと同じで、“價”は後置されていない。

しかし、これ以外にも「動作や状態の発生を否定する“沒有”」は、『兒女英雄伝』には三例確認され、いずれも“價”が接尾する用法となっている(前述5. 1. 4. 1. (1))。太田(1988, p.337)が、この三例を“未”の意味の用例として含めなかったのは、この“沒有價”の用法が、いずれも言い切りの形で終了しており、後に述語が続かないため、“未”と同じ副詞として、同等に扱えないと判断されたことによると推察する。しかし、文意からも、この三例は、そこで話題となる行為や事態がまだ起こっていないことを表しており、未然の“沒有”に“價”が付いて語気を強調し、言い切りの形をとったもので、後に他の動詞や形容詞が省略されたものと考えられる。

つまり、『兒女英雄伝』において、動作や状態の発生を否定する“未”の意味を表わす“沒有”は五例あり、そのうち三例には“沒有價”として“價”が接尾し、言い切りの形式として現れる。出現状況としては、“價”のない用例は叙述文(地の文)に用いられ、“價”の接尾された用法は会話文中に用いられている。また、話者は「鄧九公の後妻」と「張家の奥さん」で、いずれも教養と地位の低い中年の女性であり、旗人ではないことは小説内で明らかにされている。太田(1988, p.337)が、“未”の意味の“沒”について旗人語の可能性を示唆しているが、『兒女英雄伝』において、話者が旗人でない者に限定されている“價”とは共起する使用例が見られないことも、その可能性を更に裏付ける要素の一つと言えよう。

## 5. 2. 『兒女英雄伝』における否定・禁止の語の接尾成分となる“價”

否定・禁止の語の接尾成分となる“價”の特徴は、次の通り。

- (1) “別”、“不用”、“不是”、“沒有”は“價”の接尾によって、禁止や否定の語気が強められる。
- (2) 本来“別”、“不用”は言い切りの形で用いることが出来るが、『兒女英雄伝』では“價”が接尾される場合、必ず後に動詞が続く。  
“沒有”、“不是”については、“價”の接尾する例は、全て言い切りの形で現れる。
- (3) 禁止の意味を持つ“莫”、“不要”、“不用”、“別”において、“別”“不用”には“價”の接尾が認められる。“莫”と“不要”には“價”の接尾する例がない。
- (4) 否定・禁止の語+“價”は、全て会話文中に現れる。
- (5) 否定・禁止の語+“價”を使用するのは、教育レベルの低い地方出身者で垢抜けない人物として描写されている中年の女性である。



## 6. 現代漢語資料における否定・禁止の語の接尾成分となる“價”

否定・禁止の語+“價”という構造は、現在一部の口語においても用いられる。意味の上での大きな変化は見られないが、用法において『兒女英雄伝』の特徴とは相違が見られる。以下、現代小説に見られる用例<sup>35)</sup>を挙げ対照する。<sup>36)</sup>

### 6. 1. 現代小説にみられる用例

#### 6. 1. 1. 1. “別價”

『兒女英雄伝』の用例では、すべて後に動詞が続くが、現在では一般的に言い切りの形で単独で使用される。現代小説においては、次のような作品に否定・禁止の語+“價”の表現が見られる。

例：馬青也抓起烟灰缸摔在地上，接着端起电视机：“不过就不过！”“別价。”少妇尖叫着扑过来按住他的手，王朔<sup>37)</sup>著『頑主』

(馬青も灰皿を手にとって床に投げつけ、続けてテレビを持ち上げました。「一緒に暮らさないってことは一緒に暮らさないってことだ!」「やめて!」妻が叫びながら、飛びかかって来て彼の手を押えました。)

例：“她不就是个大百货商场的大组长吗？告诉弟兄们，轮班儿到柜台上找找她的茬儿，一人给她来他妈的二十条意见！先把她的奖金扣没了，再变着法子把她那大组长给撸了！”

“別、別价呀！”烧鸡刘反倒给求上情了，馮苓植<sup>38)</sup>著『猫膩』

例：“別介，哥们儿，三更半夜地咱还是顺着点它，回头说不走真不走了，咱仨大活人上哪儿再找车去？”王朔著『千万别把我当人』

例：他爹听了，忙拦阻说：“別价，太后跑了，八旗兵撤了，连肃王府都挂了白旗，咱能顶得住鬼子的洋枪吗？”鄧友梅<sup>39)</sup>著『煙壺』

例：“別介，別价，老爷子一骂全义，不又把我搁进去啦！”陳建功、趙大年<sup>40)</sup>著『皇城根』

例：“別介……等一会儿，再等等……”他突然变得凄凄惶惶的。(14) 魏潤身著<sup>41)</sup>『撓攘』

#### 6. 1. 1. 2. “不价”・“不假”

例：“老人家，你常到城里来吗？”“不价！庄稼人，除围着乡庄子转转，没见过大世面。”李英儒著『野火春風鬪古城』(5)

(「おじいさん、よく街中に来るのですか?」「いいや!田舎者で、村の周りから出ないもので、世間が狭いのです。」)

例：“冬儿，你别认为：妈有你这样的儿子是觉着受了连累，不价，我养你这样儿子觉得露脸。”李英儒<sup>42)</sup>著『野火春風鬪古城』(19)

例：“不价，不价！你快拆开信看吧，他们在那个鬼地方生活着，比地狱里都够呛呵！”李英儒著『野火春風鬪古城』(22)

6. 1. 1. 3. “要不價”

このほかに、周立波<sup>43)</sup>の『暴風驟雨』には、“要不價”という固定的な表現が多く用いられる。

例：好几个声音回答：“一定有枪。”“那还能少？”“要不价，他家修四座炮楼子干啥？”（第2部9）

（いくつもの声が答えました。「必ず拳銃がありますよ。」「そりゃ絶対少ないことがあるるか？」「そうでなかったら、彼は四つ砲塔を作ってどうするのだ？」）

例：“得划地为牢，要不价，跟头年韩长脖似的，蹶大青顶子，也是麻烦。”（第2部5）

例：老孙头接过嘴来说：“你娘们平日戴的金镯子，你二儿媳过门戴的金钳子，你小儿媳的一副四两重的金镯子，还有你老伴的金屁股簪儿、金牌子、金表、金砖，趁早献出来，要不价，咱们没有头。”（第2部6）

“要不價”は、『北京話詞語』にも収録される。<sup>44)</sup>

6. 1. 1. 4. その他の現代の北京口語に確認される用例<sup>45)</sup>

以下に、『兒女英雄伝』では使用されるものの現代北京語ではあまり使用されない用法と、現代の北京口語においてそれに代わる用法を挙げる。

“不用價”

既に例を挙げたように、『兒女英雄伝』の用例は、動詞が後に続く。これに対し、現在北京語では、一般的に“甬價”を使うことが多く、更に単独で用いられる。“甬”は、“不用”の合音で、現代の北京口語で使用されるが、『兒女英雄伝』には見られない。

“不是價”

現代北京語では、時々使用されるが、現在多くは“不價”を使う。これに対し『兒女英雄伝』には“不價”はない。

“沒有價”

現代の北京口語では時々使用されるが、現在多くは“沒價”を使う。これに対し『兒女英雄伝』には“沒價”はない。

否定・禁止の語+“價”の用法は、『兒女英雄伝』と現代小説に見られる用例、現代の北京口語の使用状況を比べた場合、次のような変化が見られる。

- ・現在では、否定副詞の接尾成分として、「否定副詞+“價”」の形で単独で使われており、後に他の成分が付かない。

- ・『儿女英雄伝』にある「否定・禁止の語 + “價”」は、現代の北京口語においては、“不是價” → “不價”、“沒有價” → “沒價”、“不用價” → “甬價” 等のように二音節化される傾向がある。

## 6. 2. 否定・禁止の語の接尾成分となる“價”と現代漢語資料の関係

『現代漢語詞典』は、否定・禁止の語の接尾成分となる“價”に対してのみ、「方言」と標記する。また、いくつかの主要な北京語辞典は、否定・禁止の語の接尾成分となる“價”に対して、北京語或いは北京土語として収録しており、これらの辞書に拠れば、否定・禁止の語の接尾成分となる“價”は、現代漢語において北京語あるいは北京土語に属する表現ということになる。(辞書類の具体例は次項7.に挙げる)また、北京人のインフォーマントが現在も使用可能であると判断する用法は、“整天價”のように全体を表す用法と、この否定・禁止表現の接尾成分となる用法のみである。ただし、前者は少し古い表現に感じられ、後者は北京語の中でも土語としてのみ使用可能であると判断している。

しかし、実際には後者の否定・禁止表現の接尾成分となる用法は、更に広範囲の東北方言内において使用されており<sup>46)</sup>、現代小説において使用が確認された小説の作家の出身地域を見ても、必ずしも北京語の話者とは限らない。ただ、作家の経歴や作風、作品の性質をつぶさに確認すると、北京語を用いた小説として知られる作品が主であること、それ以外では周立波の『暴風驟雨』のごとく、作家自らが意識的に卑俗印象を与える東北方言を用いたことを表明している作品(『『暴風驟雨』是怎麼写的?』(pp.118-123)、『『暴風驟雨』写作經過?』(pp.128-132)にその理由が明記されている[注:43参照])にその使用が多く見られる。作家の北京での就学経験や東北地域での就労経験に裏打ちされた(注:37-43参照)北京や東北方言との深い関わりを指摘することが出来る。

## 7. 現代漢語詞典及び主要北京語辞典の用例と解釈

主な辞書類の用例と解釈は次の通りである。

『現代漢語詞典』

“家、价” [jie]

- 1 〈方〉助词，用在否定副词后面加强语气。  
“不～”、“甬～”、“别～”(注意)跟否定副词单独成句，后面不在跟别的成分。
- 2 某些副词的后缀：成天～忙”、“整天～响”。

『北京土語辞典』

“价”：作词尾，轻声。

如 甬价：表不同意之词

别价：不要这样做

不价：拒绝之词

成年价：整年地：老张成年～在外地办采购

整天价：每日：这条街，整天～车来人往，非常热闹。（后两例也写作“家、际”）

『北京話詞語』

“价”：又作“际、家”，词尾。读轻声。表达某种语气、意味。“价”（jià）变读。

“别价”：又作“别介、别节、别加、别家”。否定别人的言行。

“成日家”：又作“成日价”。整天，时常。

『北京話語匯』（修訂本）

“别价”：价不念 [jià] 的本音，念jie轻声，是北京口語。别价就是别的意思。

“不价”：不然的意思。

“整天价”：成天，但有几个成天连续的意思。

『北京方言詞典』

“别价”=别咖、别计：不要这样

『北京土話』

“别介”：别介者，不要如此也，无须也。《〈儿女英雄传〉》作“别价”。

以上のように『現代漢語詞典』や主要北京語辞典類には、状況や状態を説明する語の接尾成分となる用法については収録がなく、5類の“整天价”、“整天价”の用法、方言として6類の否定詞+“價”の用法を収録するにとどまる。

## 8. 否定・禁止の語の接尾成分となる“價”の特質

### 8. 1. 近代漢語白話資料における否定・禁止の語の接尾成分となる“價”

一方で、“價”は『明清吳語詞典』にも収録されており、“①<代>这样。②<助>一般用在状语后，表示方式、数量、声音等，相当于“地”（的）。”（原文）と解説される。『漢語詞典』には、“價”：“（・《丫 嘎）附在述語前之副詞詞尾，恰如現在通用之‘地’，如：震天價響、竟天價燒起來等，舊少說中常見之，本吳語。”（原文）とある。また、『中日大辭典』には、「“價” [jie] は、副詞接尾字として用いられ、元曲・旧小説・現代吳語にも用いる“地”に同じ」とあり、いずれも吳語との標記が見られる。

本書で扱った資料からも、1から5類の用法は、幅広い資料で検出されていることから、古くは特定の方言に限らず用いられたことが裏付けられている。これに対し、6類の「否定・禁止の語接尾成分となる“價”」は、こうした用法とは特質が異なるものと考えられる。

『儿女英雄伝』の著された清代の白話資料のうち、『儒林外史』、『海上花列伝』<sup>47)</sup>、『老残遊記』、『官場現形記』、『孽海花』等では、6類の「否定・禁止の語の接尾成分となる“價”」を確認することが出来ない。用例が確認されたのは多くの資料の中でも、『醒世姻縁伝』、『儿女英雄伝』である。このことから、“價”が使用されエリアは、北京を中心として東北地方を含む北方方言の一部地域に絞ることが出来る。ただ、北京語による白話資料の中でも、何故、

『儿女英雄伝』に突出してこの“價”の用例が多く現れるのか。最後に、『儿女英雄伝』と他の北京語による白話資料の特質をそれぞれ明らかにし、その言語の性質と“價”との関係に言及する。

### 8. 2. 近代北京語白話資料における否定・禁止の語の接尾成分となる“價”

まずは、北京語に基づくいくつかの資料の特質と“價”の使用状況を確認する。

太田(1988, p.286)は、七つの北京語の語法特典を挙げ、その特徴について「『紅樓夢』、『儿女英雄伝』、『三侠五義』、『語言自邇集』は、ほぼ具備し基本的に北京語に基づく」としている。<sup>48)</sup> 更に、『中国語学新辞典』は、『紅樓夢』の脂本<sup>49)</sup>について、「対話は全般的にやや硬いが、当時の旗人層に用いられた北京語をかなり忠実に反映していると思われ、清代中期の北京語の大概を探る資料として、価値が大きい。」(p.262)と評する。また、「『三侠五義』<sup>50)</sup>は、石玉崑は天津の人であるが、北京語を自由にあやつり、この本は彼の口語をもとにしているため、文章に躍動感があり、同時の“説書的”(講談師)の言葉を彷彿させると同時に『咱們(包括系)、給、來着、別、很(状語用)]などが用いられ、北京語の姿をよく伝えているほか、『今兒、明兒、這兒、那兒、有活頭兒、活脫兒、倆、趁早兒、早期、(沒他的)跑兒、管~叫、~打發了、耗子、任嗎兒、那麼(方向)]など、現代北京語に連なるものが少なくない。」(p.266)とする。

そこで、ここで指摘のある語彙について、『儿女英雄伝』、『紅樓夢』での使用状況を確認すると、“今兒、明兒、這兒、那兒、倆、趁早兒、早期、~打發了、耗子”等は、『儿女英雄伝』、『紅樓夢』にも共通して見られた(“跑兒”は『儿女英雄伝』のみ)これらの三作品には現代北京語へと連なる語彙に共通するものが多いと言える。しかし、“價”の用法に関して言えば、『紅樓夢』、『三侠五義』においては、「一定の範囲時間を示す語の接尾成分となる“價”」に用法が限定され、「否定・禁止の語の接尾成分となる“價”」の例は確認できない。

### 8. 3. 社会性と役割語としての性質

これらの近代北京語白話資料の言葉の性質には、次のような違いが考えられる。

人民文学出版社『儿女英雄伝』後記(p.911)に、その特徴が述べられている。「『儿女英雄伝』は活発に生き生きと、かつ自由自在に北京語を使うところに、更に明らかな特徴がある。それは、『紅樓夢』において、貴族が使う官話ではなく、庶民の聴衆に合う中下階階級の人々の口頭語であり、極めて純粋な北京方言土語であり、俗語民間の諺であり、意のままにのびのびとし、生き生きとして真に迫るのである。」

更に、太田(1988, pp.300-301)には、次のような指摘がある。「最初に考えなければならぬことは、会話の文と、地の文の区別である。地の文は、やや文語がかった簡潔な表現をとっており、口語とはかなりの距離がある。したがって、北京語としての特徴は、ほとんど現れていない。(中略)では、会話の文はすべて口語的であるかというに、話者と、会話のおこなわれる場とによって、差異がある。女性は男性よりも、教養のない者は教養のある者よりも、こどもはおとなよりも、興奮した場合はしない場合よりも、口語あるいは俗語に近



いことばを用いることは当然である。」

『兒女英雄伝』の否定・禁止の語の接尾成分となる“價”は、全て張家の奥さん（張太太）と鄧九公の後妻（姨奶奶）、能仁寺の住職の妾など、あまり教養の高くない地方出身の中年女性の会話文中で使われる。このことから、否定・禁止の語の接尾成分となる+“價”は、口語であり、尚且つ比較的卑俗な表現に属する言葉であり、性別、階層による社会方言の一つといえる。

加えて、太田（1988, p.304）は、「土音土語は、もともと一定の文字をもたないものが多い。それを、しいて文字で書きあらわすのであるから、辞書における発音や意義とは、一致しないことが少なくない。」と指摘する。否定・禁止の語の後ろ+“價”[jie]について、辞書表記の文字さえも一定ではなく、“價”のほかに、“家”、“假”、“介”、“節”、“咖”、“際”、“計”とも表記され、更に各々の漢字が表す意義もまちまちである。これは、否定・禁止の語の接尾成分となる“價”が土音土語である可能性を示している。

ここで、『兒女英雄伝』における話者の方言の地域性について確認する。太田（1988, p.302）が「いうまでもなく、本書は小説であり、会話教科書ではない。まして登場する人物も北京人とは限られない。」と言うように、実際、若様の妻になった張金鳳の父親張樂世は、河南の彰徳人、その妻である張家の奥さんは、京東（開封の東方）の人である。太田氏によれば、「特に張家の奥さんは、河南あたりの方言を用いる。」と言う。一方、九公の後妻は、淮南（江蘇）の人で、もう一人の能仁寺の住職の妾は荏平（山東）の人である。これらの方言地域には、共通するような統一性はなく、更に、『醒世姻縁伝』にも多く見られたことを考慮しても、『兒女英雄伝』においては、各人の個別の方言を正確に反映、描写するために使用されたとは考えにくい。極めて卑俗な印象を与える表現であるため、話者の田舎臭い素性を強調するために、北京語を操る作者が敢えて登場人物にこの語を使わせた可能性が高いと見られる。これは周立波の『暴風驟雨』において、山東方言を含む東北の知識階級のものではない言語を意識的に使用したスタンス（注：43参照）にも共通するものである。

つまり、『兒女英雄伝』においては、“價”はひとつの役割語としての機能を果たしているのである。役割語とは、金水（2000, pp.311-351「役割語探求の提案」）において提唱された概念である。金水（2003, p.205）において、「ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。」と定義づけられる。<sup>51</sup>『兒女英雄伝』において、“價”は、話者の方言を正確に反映するためのものではなく、話者のキャラクターを効果的に演出する目的で用いられており、まさに役割語として活用されているのである。

#### 8. 4. 地域性と土語としての性質

『兒女英雄伝』中の否定・禁止の語の接尾成分となる“價”は、『元曲積詞』の分類にはまだみられない。近代漢語白話資料においては、『醒世姻縁伝』、『雍正剣侠図』、『官話類編』に

現れる。現代文学作品においては、北方方言地域の出身である作家による作品に用例が見られるものの、相対的に作品数は少なく、更に、特定の作家に用いられるなどの偏りがある。作者の言語環境という面から考えた場合、(前述6. 2.) で述べたように、これらの作者の出身や上述作品全体的に含まれる語彙の方言に共通する地域は、やはり、山東省から北京辺りを含む北方方言の言葉とすることになる。

以下、『漢語方言大詞典』に収録される関係語彙は次の通りであるが、ここでもやはり、冀魯官話、東北官話、北京官話として多く用いられている。(例文省略)

“价”：1 〈助〉相当于“的”或“地”。①冀魯官話。河北。②中原官話。河南内黄。③晋語。河南新乡、汲县。陝西西部。2 〈助〉为加强语气，用在否定词后，表示劝阻或不同意。北京官話。北京 [·tɕiɛ]。

“别家”：1 〈动〉不要这样。北京官話。北京 [pie<sup>35</sup>tɕiɛ°]。

“别介”：1 〈动〉不要这样。①东北官話。东北 [ɕpie·tɕiɛ]。②北京官話。北京。

也作“别价”：①北京官話。北京 [pie<sup>35</sup> tɕiɛ°]。②冀魯官話。河北昌黎 [pie<sup>24</sup>tɕiɛ°]。③中原官話。山东平邑 [pai<sup>53-55</sup> tɕiə°]。(“别节”见“别介”)

“没价”：1 〈动〉没有。①冀魯官話。山东冠县 [mie<sup>55</sup> tɕia°]、寿光 [mu<sup>43-34</sup>ka°]。②中原官話。山东平邑 [mən<sup>312-32</sup>tɕiə°]。2 〈副〉没有。冀魯官話。山东堂邑、冠县 [mei<sup>55</sup>tɕia°]。

“没有家”：〈动〉没有。晋語。内蒙古 呼和浩特。

“没的家”：冀魯官話。山东。1 〈代〉怎么。2 〈副〉不必。

“不价”：1 〈副〉不，表否定。①东北官話。东北 [pu·tɕiɛ]。②北京官話。北京 [pu<sup>35</sup>tɕiɛ°]。2 〈副〉不这样。北京官話。北京 [pu<sup>51</sup>tɕiɛ°]。

“不介”：1 〈副〉表否定。①北京官話。北京 [pu<sup>51</sup>tɕiɛ°]。2 否则，不这样。东北官話。东北 [pu·tɕiɛ]。

## 9. 表記と発音

### 9. 1. 文字表記の問題

早期の用例では、大半が“家”を用いる。香坂(1987, p.482)では、“價”、“家”、“假”について、「この三文字は音を同じくしているが、声調を異にしている。(“價”は去声、“家”は陰平声、“假”は上声・去声)。これらが通用したのは、恐らく、この文字が軽声に読まれたからであろう。(中略)『水滸』からの例で、“假”を用いているところを、遅れて出た版本では、“價”に改めている、これは、“假”が実義をもったものと誤解される恐れがあったからかも知れない。」としている。続けて、香坂氏は、『紅樓夢』(兪平伯校注本)には“成日家”など、“一年價”(53回)を除き、“家”でほぼ統一され、現代中国語にもこのまま使用されていると言う。

『兒女英雄伝』においては、版本間の異同はほとんど見られず、基本的に“價”を用いる。ただし、二箇所、「光緒6年本」のみが異なる表記を用いる箇所がある。(注：4, 5参照)。



例：他（張太太）道：“你們這些人們都（4 別價說了 6 別家說了 c別價說了）<sup>52)</sup>。(21)

## 9. 2. 発音の問題

辞典の発音は、主に [jie] で統一されているものの<sup>53)</sup>、文字表記には統一性がない。例えば、“家”、“假”、“價”、“介”、“節”、“咖”、“際”、“計”等の漢字が用いられている。発音が異なる原因について、香坂（1983, p.211）は、老舎の『駱駝祥子』“整天际”、“成天际”の例を挙げ、「“際”は歴史的には“價”“家”“假”に書かれたものであるが、軽声に読まれ、主要母音があいまいになるために、“際”字を当てたものである。」とする。更に、香坂（1987, p.483）では、“价”、“家”が軽声で、主母音があいまいになり、さらに主母音を落とすに至った結果であると思われる」とも述べている。

実際に1990年に北京で実施した北京人への聞き取り調査では、上述した表記の漢字以外に、“見”、“結”などと書く人もいた。否定・禁止の語の接尾成分となる“價”は主に口語として使われるため、“價”に対して、はっきりとした文字を認識していない人が多いことが調査により判明している。“價”の発音や文字が不確定である理由は、方言であり更に口語としての土語の性質が強いために、本来、特定の字を持たなかったことにあると考えられる。

## おわりに

最後に“價”の働きについて触れる。1から5の用法は構造助詞に、6は語気助詞に近い働きをする。本稿の1から5の用法は、通常“地(的)”に置き換えが可能であり、そのうち1から3の用法では“價”または“地(的)”を省略できない。しかし、4や5の用法では省略が可能であり、省略しなければ意味が強調される。一方、6の用法は、“地(的)”との入れ替えは出来ないが、“價”は省略可能であり、やはり省略しなければ意味が強調される。

『漢語大詞典』はいずれも助詞として分類するが、『現代漢語詞典』では近年、改訂がみられる。第4版は、“①<方>助词, 用在否定副词后面加强语气。: 不~, 甬~, 别~。注意: 跟否定副词单独成句, 后面不再跟别的成分。②某些副词的后缀。: 成天~忙、震天~响”とする。挙例①は本稿6の用法、②は4と3に相当する用法である。興味深いのは、第5版では②の用法を“用在某些状语的后面”と書き換え“后缀”の表現を削除している点である。これは、“震天~响”のような例の場合、“價”を省略すると文が成立しなくなる、つまり“價”が文の構造に影響を与える文法的機能を持ち合わせていると解釈されることから、“后缀”の表現を削除したのではないかと推察される。

実際に、1から3の用法において“價”は“地(的)”に極めて近い文法機能を担っており、既に“后缀”、つまり接尾辞とは言い難い性質を帯びている。また、6の用法は“價”を省略しても文は成立し、強調の意味を持つなど極めて語気助詞に近い。だが、近代漢語白話資料においては、後ろに被修飾成分が続く用法も存在することから、現代漢語の如く語気助詞と断定することは出来ない。いずれの用法も徐々に近似する用法である助詞の文法機能と同様の性質を帯びる傾向が確認されるが、変遷過程を考慮しここでは接尾辞の発展型として扱っている。

## 注

- 1) 「光緒4年本」、「光緒6年本」は、“的價”につくる。「抄本」は“價的”につくる。
- 2) 翟 (2008, p.375) に、「“似”系と“般”系の山東方言」を用いた白話小説における出現頻度を比較した表がある。下記(表2)にその該当する内容の抜粋を挙げる。“也似價”には賓語が間に入るなどの複数のパターンが見られるものの、“價”の付く形式は『兒』の用例に片寄っている。このほかに『水滸伝』、『清朝秘史』にもいくつか見られる“也似”にしる“似”にしる、“價”がつく表現は、山東方言を用いたとされる『金』、『醒』、『聊』には全く現れていないことが確認できる。一方、『兒』においては、“也似”や“似”が裸で用いられるということではなく、“的”が付くか、もしくは“價”が付く形で用いられる。ただし、“也似”への接尾成分としては、“價”よりも“的”の方が優勢である。(表2)内の小説の略称は原文のまま用いた。それぞれ頭文字一字を用いて表記されており、『金瓶梅』、『醒世姻縁伝』、『聊齋志異』、『岐路灯』、『兒女英雄伝』を指している。)

(表2)

	金	醒	聊	岐	兒
也似	51	14	0	21	0
也似的	6	3	0	0	13
也似價	0	0	0	0	7
也似價的	0	0	0	0	5
似	5	2	2	0	0
似價	0	0	0	0	1
似的	2	101	7	1	57

- 3) 『兒女英雄伝』にはほかに、よく似た文章表現があり、その中では“也價”となっている。しかし“似”がないと意味が通らず、文字が抜けている可能性も考えられる。ただ、「抄本」、「光緒4年本」、「光緒6年本」とも同じ“也價”という記述になっている。

例：門外化縁的那个老和尚也來幫着穿梭也價服侍公子。(5)

(外で布施を請うていたあの和尚も来て手伝い、織機の梭のように頻繁に行き交って若様の世話をしました。)

- 4) 「抄本」、「光緒4年本」は“家”、「光緒6年本」は“價”につくる。
- 5) 「光緒6年本」のみ、“別家説了”と“家”につくる。
- 6) 「光緒4年本」は“的”、「抄本」、「光緒6年本」は“的啊”につくる。
- 7) このほかに『元曲釈詞』には、以下のような“家”の解釈も挙げられているが、本論で扱う用例とは性質が異なるため、ここに(注)として挙げる。

## ①人を表す語の接尾成分となるもの

『元曲釈詞』(第2巻, p.130)は、次のように解説する。(以下は拙訳によるものである。

( )内は、原文において解説に該当する部分である。例文と区別するため筆者が、括

弧を付加した。)「“家”の字は接尾助詞で、人称(自称、他称、或いは普通人称)の後に付き、意味は無い。」例としては、“唐・司空図『力疾山下看杏花』詩：‘儂家自有麒麟閣，第一功名只賞詩。’‘儂家’即儂，亦即我也(不同於今上海方言稱儂為你)。”(原文ママ)を挙げ、「唐、五代には既に存在し、“家”は“價”とも作り、用法は同じである。開口呼で、gaの如く読む。」としている。

この用法については、太田(1958, pp.92)にも解説が見られる。「接尾辞“家”は名詞に付き、それに共通する性質、身分、職業などを示すものである。例えば、“孩子家”(子供というもの)“姑娘家”(娘というもの)。」古い例として、「“霓裳禁曲無人解，暗問梨園弟子家。”(于鵠詩)」を挙げている。

②それ自体が人を指すもの

例として、『李逵負荊』三「浪裏來煞」：“使不的三家來便廝靠，則這三寸舌是俺斬刀。”(上舉“家”字，猶云人，“三家”即指宋江、王林、李逵三人。)『京本通俗小説・錯斬崔寧』：“后邊兩個趕到跟前、見了小姑娘子與那後生、不容分說、一家扯了一個。”(一家謂一個人。)が挙げられる。『元曲積詞』(第2卷, p.132)

③場所を指すもの

例として、『猿聽經』三「耍孩子」：“果然是依為佛族菩提處，堪作禪僧寂靜家，”(此“家”字，為地方、處所也。)が挙げられる。『元曲積詞』(第2卷, p.134)

④割合を示すもの

例として、『陳州糶米』一折、白：“我若得多的、你也得少的，我和你四六家分。”(此“家”字猶成，猶停：“四六家分”，即謂四六成分也。)が挙げられる。『元曲積詞』(第2卷, p.134)

8) 『兒女英雄伝』以外は、一部の用例にのみ( )内に拙訳を付す。

9) 『全元曲』については、中州古籍出版社の資料を使用したため全て簡体字の表記を用いるが、簡、繁の字体の相違とは別に、『元曲積詞』や『詩詞曲語辭積』における“價”の文字表記が異なる用例がある。このうちの異なる文字が用いられている例を下記に挙げておく。いずれも“加”の文字を用いている。(以下原文)

『全元曲』馬致遠 散曲 小令『寿陽曲』：“一會加上心來沒是處，恨不得待跨鸞歸去。”『詩詞曲語辭匯積』(p.365)

元無名氏『賞花令』套曲『臥枕着床篇』：“豁的一會加精細，烘的半餉(晌)又昏迷。”『詩詞曲語辭匯積』(p.365)、『元曲積詞』(第2卷, p.131)

10) ここでは、『西廂記』1990年、揚州古籍書店発行に収める影印本『董解元西廂記』(版心：「董解元搗彈本」)顧渚山樵点定、夢鳳樓、暖紅室校訂の版心にある葉数を記す。以下、同様である。

11) 明清善本小説叢刊続編「李笠翁批閱本」『三国志』には、“竟天”の後に“價”はない。

12) 香坂(1987, pp.470-483)にも、『水滸伝』“價”の分類がある。ただし、本書では容輿堂本を用いたため、用例並びに分類は完全に一致するものではない。

13) 中華書局『金瓶梅』会評会校本には、第97回の冒頭に、“追悔当初辜深愿，经年价，两成幽

怨。”の用例がある。この用例は、量を表す語の接尾成分となり「不定の時間量」を表す用法である。しかし、主な版本3種類（詞本、崇本、張本）のうち、詞本には冒頭の一節が存在しない。本稿では人民文学出版社『金瓶梅詞話』を用いており、これは詞本を底本としているため、この用例には触れていない。

- <sup>14)</sup> ( )内は、上海古籍出版社古本小説集成影印本（尚友堂刊本）では、文字が擦れて読み取れない。人民文学出版社活字本（陳邇冬、郭雋傑校注）によって補足した。
- <sup>15)</sup> 影印本（尚友堂刊本）では、“恨命”とするが、前後の文脈から考えると“狠命”の書き換えと見る方が文意は通ることから、ここでは、“狠命”の用法として分類した。
- <sup>16)</sup> ( )内は、上海古籍出版社影印本（同徳堂刊本）では、文字が潰れて読み取れない。中州古籍出版社簡体字活字本（童万周校点）によって補足した。
- <sup>17)</sup> 上海古籍出版社による古本小説集成『醒世姻縁伝』（同徳堂刊本影印）では、同じ文字を重ねる際、この表記“匕”を用いている。中州古籍出版社による『醒世姻縁伝』（簡体字活字本）では、“奶奶”となっている。
- <sup>18)</sup> 影印本（同徳堂刊本）では、多く“没”の字体を用いるが、“沒”も見られる。本稿では原文に従い表記した。
- <sup>19)</sup> 同小説には、いくつかの別名がある。『中国通俗小説書目』孫楷第（p.221）によると、『忠烈俠義伝』第120回、又の名を『三俠五義』。兪曲園改訂本を『七俠五義』とした。清代無名氏撰、旧本題は『玉石崑述』とある。
- <sup>20)</sup> 本稿における現代漢語とは、普通話を示している。
- <sup>21)</sup> 文成分としては補語の役割を成している。
- <sup>22)</sup> 『官話類編』においては、テキスト編纂に際して、語彙に南北の官話に相違が見られた場合、該当する語彙について、左右に文字を振り分ける。この点については、『官話類編』のEXPLANATIONSに凡例がある。「テキストの聞き取りに際し、右側をNorthern Form 左側をSouthern Formとする。更に、NorthernとCentral、または、CentralとSouthernの二種類の判断（原文：duplicate reading）がなされる場合がある。」
- 本稿では、『官話類編』におけるこのような併記に際し、例えば、3つの語彙が併記される場合は、一番右に記された文字（凡例によればNorthern）を [ / / ] 内の右端に、一番左側に記された文字（凡例によればSouthern）を左端に記した。
- <sup>23)</sup> ( )内は、章と例文の番号を示す。
- <sup>24)</sup> 上記に挙げた資料の書名を省略し、一文字目のみを記す。ただし早期用例については、『全元曲』の用例が多いことからまとめて「元」と略し資料名を包括した。また「醒」とは『醒世姻縁伝』を表す。尚、表中の ■ の行は、大項目を示し、白地の行は下位分類を示す。
- <sup>25)</sup> 容與堂本には見られないが、『李卓吾先生批評忠義水滸伝』施耐庵集撰、羅漢中纂修には「数詞+量詞構造」の例が見られる。例：看見宋兵時，一派價把火燒將來。(118)
- <sup>26)</sup> 次のような例は“價”がないと成り立たない。例：一日，正遇着陰天，霎時傾盆價下起大雨來。(24)（ある日、曇り空に、急に盆をひっくり返したように激しい雨が降り出してき



ました。)

更に、次のような例は、“價”がないと文の意味が変わってしまう。例：只是一會兒價回過頭來往後看看，(32) この「ただ時々振り返ってみると」という表現は、もし“價”がない場合、「暫くして振り返ってみる」という意味になり、文脈の内容と合わなくなる。

<sup>27)</sup> 李宝嘉：江蘇武進人（人民文学出版社『官場現形記』「後記」による）、金天羽：江蘇吳江人（上海古籍出版社『孽海花』「前言」による）、曾朴：江蘇常熟人（『中国近代文学大辞典』による）、劉鶚：江蘇丹徒人（上海古籍出版社『老残遊記』「前言」による）

<sup>28)</sup> 『醒世姻縁伝』については、作者は不詳とされるが、使用される語彙の特徴から、北方方言による作品と位置づけられる。参考：胡（1931）、閻（1988）植田（2004）、（2005）、（2006 a）、（2006 b）。

『雍正剣侠図』は、『中国曲芸志』北京巻に「清末民初に講談師（評書芸人）の常傑森が1920年代に天津で製作発表した。常傑森が編纂初演し、新天津報に1928年から1943年にかけて出版された。」とある。常傑森（1875年～1929年）北京人とも山東人とも言われる。岡崎（2006）に詳しい解説を見る。

<sup>29)</sup> 「光緒6年本」のみ、“別家説了”と“家”につくる。

<sup>30)</sup> 「抄本」のみ文章表現が異なり、“不用老爺操心，”とする。

<sup>31)</sup> 用例が多いため、一部のみを挙げる。

<sup>32)</sup> この二点は、現代漢語の使用例として『中国語文法用例辞典』にも列挙される項目である。

<sup>33)</sup> 本稿におけるインフォーマントの言語環境は、次のとおりである。

生年：1978年生まれ、原籍：北京市。学歴：大学院博士課程修了。経済学博士。

言語環境：1978年—2000年北京市。2000年—日本。

<sup>34)</sup> 以下、用例は一部省略する。

<sup>35)</sup> 北京大学漢語語言学研究中心の語料庫を活用した。その結果、七例が検出された。

<sup>36)</sup> “價”において検出された用例は、全て参考資料に挙げた出版物による確認を行ったが、張郎郎著『金豆兒』“別價”、“不價”（各1例）、閻西南著『不光』“別介”（1例）は、刊行物を確認できないためここでは用例を割愛する。

<sup>37)</sup> 1958生まれ。満洲族。出生地は遼寧省、間もなく北京へ移動し北京で育つ。（『王朔文集』）王朔のほか、次に例を挙げる鄧友梅、陳建功の三名の作家は、『北京地域文学語言研究』中の北京語語彙編に北京語小説の代表的な作家として名を連ねる。同書で張（1999, p.24）は、王朔について、北京地域文学の代表的な作家として名を挙げ、「その特徴は、通俗的で風刺の効いた筆致の作品を創作する作家である。」と評し、更に、北京口語を駆使した作品として、『編輯部的故事』が有名であると記している。

<sup>38)</sup> 1940年生まれ。出生地は山西省代県。（『中国作家大辞典』による）

『猫賦』の「内容提要」に“京腔、京調、京味儿尽写市井生活”との評がある。

<sup>39)</sup> 1931生まれ。原籍は山東省。天津生まれ。張（1999, p.23）に、北京地域文学の代表的な作家として名を挙げられる。更に、同書で「北京の特徴を持った文学作品の中で、『偽物を本物と言って人をだます（原文：“以假乱真”）』名人である。彼は、山東人であるが、生粋

の北京の特色のある作品として文壇に名を馳せた。彼は作品において、ただ単に北京口語を把握しているだけでなく、北京人の外観のみならず、内面に潜む特徴までもしっかりと捉え、北京の風俗民情を作品の中に融合させた。」と評されている。

- <sup>40)</sup> 陳建功：1949年生まれ。出生地は広西省北海。1982年北京大学中文系入学。（『中国現代作家大辞典』による）張（1999, p.411）に、北京地域文学の代表的な作家として名を挙げられている。

趙大年：1931年生まれ。満洲族。出生地は北京。1980年から北京作家協会理事。

- <sup>41)</sup> 魏潤身：1946年生まれ。出生地は北京。1957年北京に移住。1977年首都師範大学卒業。1980年代から作家活動を開始する。現在、首都師範大学副教授。（『血沁』序による）

- <sup>42)</sup> 1914年生まれ。出生地は河北保定清苑。（『野火春風鬪古城』序による）

- <sup>43)</sup> 1908年生まれ。出生地は湖南省益陽。（『暴風驟雨』序による）

『周立波写作生涯』に「『暴風驟雨』是怎麼写的？」(pp.118-123)、「『暴風驟雨』写作經過？」(pp.128-132)という論文の掲載がある。ここには、自らが1946年に東北に転任し、『暴風驟雨』の執筆を開始した経緯や基本的なスタンスが記されており、その中に言語について触れた一節がある。これによると、(以下要約)「毛首席の指示で農民の言語を学ぶようになり、『暴風驟雨』では、農民には農民の言葉を用いて書くことを試みた。なぜなら、知識分子の口調と農民の言葉は異なるからである。しかし、始めたばかりなので誤りも多い。また、特に東北の言葉は地域によっては、山東方言が広く使われている。」と書いている。この記述により、周立波は、北方方言の地域の出身者ではないが、『暴風驟雨』において、山東方言を含む東北の知識階級のものではない言語を意識的に使用した事実を確認することができる。

- <sup>44)</sup> 小説選刊（期刊）、『中国伝統相声大全』第1巻 馮不異・劉英男主編、文化芸術出版社、1993年、劉宝瑞相声全集（第1盤）、中国広播音像出版社、1990年などの例を挙げる。

- <sup>45)</sup> 1992年の北京での調査結果を基に、2012年に改めて北京人インフォーマントによる確認を行なったデータによる。

- <sup>46)</sup> 北京人のインフォーマントは、北京語の通俗的な表現と認識している。この点においては、複数の北京人に確認を行ったが、いずれも同じで、学歴の高い者ほど使用を避ける傾向が見られた。この問題に関しては、1992年5月に河南省信陽市で開かれた第5回全国近代漢語研究討論会において、『『儿女英雄伝』中的“價”』に関して発表を行った際、参加した北方方言を話す複数の研究者から、実際には、河南省、山東省など北方方言内で広く使用されているという意見が寄せられた。北京語の辞典類には、多く北京語として収録されているが、実際には、更に広範囲に使用される用法である。

- <sup>47)</sup> 『海上花列伝』にも呉語と解釈される“價”の用法が見られ、『明清呉語詞典』では、“这样”の意味として、“来安看是朱蔼人的管家、名叫张寿、乃嗔倒”做啥嘎！吓我价一跳！”（5）の例を挙げている。また、人民文学出版社の『海上花列伝』の方言簡釈（p.625）には、呉語として“价”（gǎ）（=这、这个。例：“是价模样，倒无啥”第2回）、他に“价末”（=那么）、“那价”（=怎样、如何）を挙げる。

- <sup>48)</sup> 具体的に基準としている内容を次に挙げる。太田（1988, p.286）は、七つの北京語の語法特典を挙げ、次のように述べる。「1）一人称代詞の包括形（inclusive）と除外形（enclusive）を“咱們”“我們”で区別する。“俺”“咱”などは用いない。2）介詞“給”を有する。3）助詞“來着”を用いる。4）助詞“哩”を用いず“呢”を用いる。5）禁止の副詞“別”を有する。6）程度副詞“很”を状語に用いる。7）“～多了”を形容詞の後におき「ずっと」「はるかに」の意を表す。以上の特徴は、『紅樓夢』、『兒女英雄伝』、『三侠五義』、『語言自邇集』もほぼ具備しているから、これは基本的には北京語に基づくといってよいが、細部については差異出入がある。また、『品花寶鑑』も3）“來着”を有せず他にも若干の問題があるが、大体北京語と言ってよい。（中略）また明末清初のものとする『醒世姻縁伝』では上の条件のうち2）、5）、6）をほぼ満足させているにすぎない。」としている。
- <sup>49)</sup> 太田（1995 a, pp.201）は、「最も原本に近いのが脂本であり、また原本から遠いのは程乙本であるといえるであろう」と評する。
- <sup>50)</sup> 同書は、『三侠五義』の表題を用いる。解説に、「元の書名を『忠烈侠義伝』と言う。後に清末の文人愈樾が補訂を加え『七侠五義』と改名して出版、これらが広く世に伝わったため、特に南方ではこの書名が一般的になっている。」とある。本書では資料としては、『七侠五義』を用いている。
- <sup>51)</sup> これと近似する概念である「位相」との相違について、金水（2003, p.37）は次のように述べている。「言葉の位相・位相差と役割後とはよく似ている部分と大変異なっている部分がある。違っている部分から先に述べておくと、言葉の位相（差）は、「現実」（リアリティ）における様相・差異を学者が研究することによって得られるのに対し、役割語は、私たち一人一人が現実に対して持っている観念であり、いわば「仮想現実」（ヴァーチャル・リアリティ）なのである。（中略）むしろ一般の話者が知識として持っているのは、役割語の知識なのである。」
- <sup>52)</sup> (4 6 c ) という簡略化した符合は、「光緒4年本」、「光緒6年本」、「抄本」の別を略称として表すものである。
- <sup>53)</sup> 黎錦熙（p.429）『漢語語法教材』二編は、「北京語ではjieと読む場合が多い」としている。



参考文献

- 香坂順一 1983. 『白語語彙の研究』, 光生館  
 1987. 『水滸語彙の研究』, 光生館  
 太田辰夫 1988. 『中国語史通考』, 白帝社  
 閻紅生 1988. 《醒世姻縁傳》詞語注釋質疑, 『北陸大学紀要』, 12, pp.111-118, 北陸大学  
 藤田益子 1992. 「『兒女英雄伝』中的“價”」(中文), 『大東文化大学外国学部学会誌』第22号, pp.123-144, 大東文化大学外国語学会  
 金水敏 2000. 「役割語探求の提案」, 佐藤喜代治(編)『国語史の新視点』, 国語論究, 第8集, pp.311-351, 明治書院  
 —— 2003. 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』, 岩波書店  
 植田均 2004. 現代方言に残存する《醒世姻縁傳》中の語彙(8), 『奈良産業大学産業と経済』, 19(5), pp.1-37, 奈良産業大学  
 —— 2005. 現代方言に残存する《醒世姻縁傳》中の軽声語(1), 『奈良産業大学産業と経済』, 20(5), pp.1-56, 奈良産業大学  
 —— 2006 a 現代方言に残存する《醒世姻縁傳》中の軽声語(3), 『奈良産業大学産業と経済』, 21(5), pp.1-28, 奈良産業大学  
 —— 2006 b 現代方言に継承された《醒世姻縁傳》中の副詞, 『奈良産業大学産業と経済』, 21(5), pp.47-84, 奈良産業大学  
 岡崎由美 2006. 四川唐門考—武俠小説と評書『雍正剣俠図』, 『三俠剣』, 『日本中国学会報』, 第58集, pp.263-267, 日本中国学会

参考資料

・近代漢語資料

- 『兒女英雄伝』, 39回抄本1函18册在国家図書館分館蔵。  
 『兒女英雄伝』, 光緒4年刊本聚珍堂書房木活字本, 『古本小説集成』, 収録影印版(山東大学図書館蔵)  
 『兒女英雄伝』, 光緒6年刊本聚珍堂書房木活字本  
 『三国演義』, 羅貫中, 1973年, 人民文学出版社  
 『李笠翁批閱三国志』, 李漁批閱, 1990年, 天一出版社, 明清善本小説叢刊続編, 朱伝譽主編, 第6輯  
 『水滸伝』, 容與堂本, 施耐庵、羅貫中, 1988年, 上海古籍出版社  
 『水滸伝』, 施耐庵、羅貫中, 1975年, 人民文学出版社  
 『李卓吾先生批評忠義水滸伝』, 施耐庵集撰, 羅貫中纂修, 1985年, 天一出版社, 明清善本小説叢刊初編, 国立政治大学古典小説研究中心主編, 第17輯

- 『金瓶梅詞話』, 陶慕寧校注, 2008年, 人民文学出版社
- 『古今小説』, 馮夢龍, (1987年1版) 1988年第2次印刷, 上海古籍出版社(天許齋刊本影印)
- 『警世通言』, (1987年1版) 1988年第2次印刷, 上海古籍出版社(金陵兼善堂刊本影印)
- 『醒世恒言』, 馮夢龍編、顧学頤校注, 1956年, 人民文学出版社
- 『醒世恒言』, 馮夢龍(1987年1版) 1988年第2次印刷 上海古籍出版社(金閭葉敬池本影印, 衍慶堂本補齊)
- 『拍案驚奇』, 凌濛初, (1985年1版) 1988年第5次印刷, 上海古籍出版社(尚友堂刊本影印)
- 『拍案驚奇』, 凌濛初著, 陳邇冬、郭俊傑校注, 1991年, 人民文学出版社
- 『三刻拍案驚奇』, 凌濛初, (1985年1版), 1988年第5次印刷, 上海古籍出版社(尚友堂刊本影印)
- 『醒世姻緣伝』, 西周生, 1990年, 古本小説集成, 上海古籍出版社, (同徳堂刊本影印)
- 『醒世姻緣伝』, 西周生編著、童万周校点, (1982年初版) 1989年第3次印刷, 中州古籍出版社
- 『緑野仙踪』, (百回本) 李百川著, 侯忠義整理, 1986年, 北京大学出版社
- 『紅樓夢』, 曹雪芹、高鶚, 1982年, 人民文学出版社
- 『七侠五義』, 石玉昆述、兪樾重編, 1980年, 宝文堂書店
- 『三侠五義』, 石玉昆著、王述校点, (『忠烈侠義伝・三侠五義』収録), 2001年, 人民文学出版社
- 『九尾亀』, 張春帆, 1994年, 上海古籍出版社
- 『八仙得道伝』, 無垢道人, 2008年, 文物出版社
- 『官場現形記』, 李宝嘉, 1989年, 人民文学出版社
- 『孽海花』, 曾朴, 1991年, 上海古籍出版社
- 『老残遊記』(『続集』, 『外編卷一(残稿)』含む), 劉鶚, 1991年, 上海古籍出版社
- 『雍正剣侠図』, 常傑森, 1995年, 北京十月文芸出版社
- 『官話類編』, (『A COURSE of MANDARIN LESSONS』,) BASED ON IDIOM Rev. C. W. Mateer. D. D, LL. D, 1909 (Revised 1906), SHANGHAI AMERICAN PRESEBYTERIAN MISSION PRESS

・早期資料

- 『全唐詩』, 彭定求編, 1960年第1版(2008年8次印刷), 中華書局
- 『全宋詞』, 唐圭璋編, 1965年第1版(2009年第8次印刷), 中華書局
- 『全元曲』, 張月中、王鋼主編, 1996年, 中州古籍出版社
- 『元曲积詞』, 顧学頤、王学奇, 1984年, 中国社会科学出版社
- 『詞詞曲語辞匯积』, 張相, 1955年(第3版), 中華書局

『西廂記』，王實甫等撰，顧渚山樵點定，夢鳳樓暖紅室校訂，1990年，江蘇廣陵古籍刻印社影印，揚州古籍書店發行（『董解元西廂記』魚尾下書名：「董解元搗彈本」、『王閔北西廂記』魚尾下書名：「王實甫正本」を収録する。）

『宣和遺事等兩種』，（中国話本体系）無名氏編著，曹平等校點，1993年，江蘇古籍出版社

・近代以降～現代漢語資料

『駱駝祥子』（修訂本），老舍，2007年，人民文學出版社

『四世同堂』，老舍，1985年，百花文藝出版社

『貓膩』，馮苓植，（「中国當代微型偵探小說」于洪笙主編收錄），2004年，北岳文藝出版社

『頑主』，王朔，2007年，天津人民出版社

『千萬別把我當人』，王朔（『王朔文集』收錄），2007年，天津人民出版社

『煙壺』，鄧友梅，（『鄧友梅自選集』（5卷）收錄），2009年，人民文學出版社

『皇城根』，陳建功、趙大年，1991，作家出版社

『撓攘』，（『血沁』收錄），魏潤身，2000年，金城出版社

『野火春風鬪古城』，李英儒，2005年，人民文學出版社

『暴風驟雨』，周立波（「中国當代長篇小說藏本」），2005年，人民文學出版社

『周立波寫作生涯』，周立波著，劉景清編，1986年，百花文藝出版社

・工具書類

高艾軍、傅民編，2001. 『北京話詞語』，（增訂本），北京大學出版社

徐世榮編，1990. 『北京土語辭典』，北京出版社

陳剛編，1985. 『北京方言詞典』，商務印書館

常錫楨，1992. 『北京土話』，文津出版社

金受申編，1961. 『北京話詞匯』，商務印書館

金受申編，1964. 『北京話詞匯』（修訂本），商務印書館

宋孝才編著，1987. 『北京話語詞匯積』，北京語言學院出版社

傅民、高艾軍編，1990. 『北京語詞語』，（增訂本），北京大學出版社

許寶華、宮田一郎主編 1999. 『漢語方言大詞典』，中華書局

宮田一郎、石汝傑主編，2005. 『明清吳語詞典』，上海辭書出版社

愛知大學中日大辭典編纂處編，1989. 『中日大辭典』（增訂第2版），大修館書店

中國語學研究會編，1979. 『中國語學新辭典』，光生館

中國社會科學院語言研究所詞典編輯室編，2002. 『現代漢語詞典』（2002年增補本）（第四版），商務印書館

中國社會科學院語言研究所詞典編輯室編，2005. 『現代漢語詞典』（第五版），商務印書館

中國作家協會創作聯絡部編，1993. 『中國作家大辭典』，中國社會出版社

張繼華，1999. 『北京地域文學語言研究』，四川人民文學出版社

孫楷第，1982. 『中國通俗小說書目』，人民文學出版社

- 孫文光主編，1995. 『中国近代文学大辞典』1840-1919，黄山書社
- 中国曲艺志全国編輯委員会等編，1999. 『中国曲艺志』，北京卷，中国ISBN中心
- 呂叔湘主編，牛島徳次、菱沼透監訳，2003. 『中国語文法用例辞典』，(改定版)，東方書店
- 中国作家協会創作聯絡部編，1993. 『中国作家大辞典』，中国社会出版社
- 『漢語語法教材』二編，黎錦熙、劉世儒，好文出版
- 漢語大詞典編輯委員会，漢語大詞典編纂処編纂1986-1994. 『漢語大詞典』，漢語大詞典出版社

## 凡例

### 1. 『兒女英雄伝』の例文について

例文は、『兒女英雄伝』光緒4年刊本聚珍堂書房木活字本、『古本小説集成』収録影印版(山東大学図書館蔵)に拠る。本文中では、「光緒4年本」と略称する。ただし、標点については、還読我書室主人評『兒女英雄伝』(上・下)董恂評爾弓校訂注積齊魯書社1989年を参照し補足した。

更に、『兒女英雄伝』39回抄本1函18冊中国国家図書館旧館蔵、『兒女英雄伝』光緒6年刊本聚珍堂書房木活字本を参照し、明らかな語句の相違については、注を付し補足した。それぞれ「抄本」、「光緒6年本」と略称する。

### ・資料間の相違

本書における『兒女英雄伝』の例文は、最終的に初刊本の「光緒4年本」を基準とし、明らかな表記上の相違や、文章表現の相違点については、各例文中に注を用いて表記の差異を記している。

一方、異体字と考えられる相違については、特に注を付さず、「光緒4年本」の文字を用いている。更に、漢字の字体も、これらの資料に基づき繁体字を用いた。

現在、存在の確認されている早期の版本については、「光緒4年刊本」が初刊本と考えられ、更に古いものとして、北京図書館(現在は国家図書館)「抄本」の存在が挙げられる。

### ・漢字表記

『兒女英雄伝』の「光緒4年本」は、木活字による版本で、基本的に繁体字が用いられている。しかし、文字によっては、現在の活字で表す繁体字とは字体が異なる木活字も間々見られる。現在の活字における繁体字で、対応しうる文字が無いものは、作字を行ったが、異体字と見做されるもので中国語の繁体字や異体字の活字で対応できないものは、繁体字により表現した。

## 2. 『児女英雄伝』を含む全般の例文の引用について

### ・会話文

例に使用する文章が、会話に該当する文は“ ”によって括る。ただし、文章が非常に長い場合は、論旨に関係しない前後の部分……として省略し、“ ”によって括ってある。

例：鄧九公説：“……，這事咱們也在明日定規。從明日起，掃地出門，愚兄一人包辦了！”(16)

### ・長文

例に使用する文章が、全体的に長い場合は、論点に関係する箇所を中心として、ある程度の内容の切れ目を目安に、読点(,)や、会話が始まる直線のコロン(:)または、セミコロン(; )で例文の引用を終えている。また、引用の用例は、読点までであっても、日本語の訳文においては、例文が途中で切れた文章にならないよう、文意に影響がない範囲で、句点の。で締めくくり、文を完結させてある。

例：曉得乾娘已經過來了，心下却十分歡喜，便叫戴嬖嬖説：(28)

(義理の母親が来ていることは知っていて、内心とても嬉しくて、婆やにこう言いました。)

## 3. 文献や辞書等の引用について

・中国語の例文などをそのまま引用する場合は、その元の論文や解説が日本語で書かれた資料であるか、中国語で書かれた資料であるかを問わず、原文が使用している中国語の字体に従い記載する。一方、中国語の論文等を翻訳して引用する場合に、問題として扱う単語の箇所や、筆者による本書の解説文中に用いる部分的な中国語の単語等については、繁体字を用いる。ただし、解説文中において、あえて原文のまま用いる必要のある文章(例えば特別な用語等、比較対照に用いた他の小説の例文、辞書中の例文など)は、その文献の表記をそのまま記載する。元々、原文資料には、簡体字と繁体字の資料両方が存在する為、本稿においては二者が混在する結果となった。原文の表記を尊重する必要性から、日本語への翻訳に際し、繁体字との混在を受け入れることとした。

・日本語の文を引用する場合は、日本語の表記は、旧漢字である場合、本書で用いる日本語漢字表記と同様、現代の漢字表記を用い記載する。

例 齊→斉 齋→斎 満洲→満州 戦→戰

なお、本稿は平成23年度日本学術振興会科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))、「近現代の漢語動詞の演変分化による機能構文の構造発展と機能義変容に関する通時的的研究」、研究代表者：藤田益子、課題番号23520499)の成果の一部である。